

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
 ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
 シャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 2 月 4 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 11名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	9名	

※事業所記入

事業所番号	3893200034
事業所名	グループホームさくらや
(ユニット名)	さくら
記入者(管理者)	
氏名	西原 香代
自己評価作成日	令和 3年 12月 28日

【事業所理念】	【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】	【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】
我が家のようにゆったりほっこり	<p>○地域での認知症についての勉強会や介護相談などの取り組みを運営推進会議の中で丁寧に説明している。今年は運営推進会議を前年にくらべると頻回に対面で開催できたので取り組みの内容が伝わったのではないかと感じている。</p> <p>○避難訓練や救命講習の内容をブログやさくらや便りには掲載しているが、コロナ禍のため家族会が開催できておらず、直接家族に伝える機会がないままなのでどこまで伝わっているのかわからない。</p> <p>○ICT導入し、記録の電子化に取り組んでいる。まだ得意、不得意の職員にわかれるが、それでも一応全職員が操作できるようになった。</p>	<p>事業所は島内にある唯一のグループホームで、海や山などの豊かな自然に恵まれた場所に立地している。職員は管理者に話やすく、幅広い世代の職員同士も良好な関係が築かれているほか、勤務シフトの変更に対応するなどの働きやすい職場環境づくりにも努めており、職員の離職率も低い。また、事業所には不穏な利用者もおり、事業所前に池があることから、日中には玄関の施錠をしているものの、自分の判断で、玄関の鍵を開けて外出する利用者もいる。さらに、テラス等へ出ることのできる扉を開けて、戸外へ自由に入出入りする利用者もいる。さらに、事業所として、昨年より介護ソフトを導入してICT化などの業務改善を図り、職員はタブレットを活用して記録することができ、使い慣れたことから、職員の負担軽減に繋がっている。事業所より少し高台にある町のひまわり百年館を活用して、週3回、「さくらカフェ」を運営し、利用者と一緒に歩いて出かけ、コーヒーやお茶などを飲むことが利用者の楽しみの一つとなっている。加えて、地域において、地域に集える場として、「さくら浜カフェ」や「さくら茶話会」を開催するなど、地域の福祉ニーズ等にも対応し、地域からも認識される事業所となっている。</p>

評価結果表

項目No.	評価項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える								
(1)ケアマネジメント								
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	<p>a 利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。</p> <p>b 把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。</p> <p>c 職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。</p> <p>d 本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。</p> <p>e 職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。</p>	<p>○</p> <p>○</p> <p>○</p> <p>○</p> <p>○</p>	<p>ケアプラン作成の際など、利用者だけでなく、他の職員からも意見を集めて本人の希望や意向を汲めるように取り組んでいる。</p> <p>ケアプラン作成の際など、利用者だけでなく、他の職員からも意見を集めて本人の希望や意向を汲めるように取り組んでいる。</p> <p>ケアプラン作成の際は家族に連絡をとり、本人の様子や気持ちを伝えるようにしている。また家族の思いも聞き取るようにしている。</p> <p>介護職員に「日々の記録」として変わったことがあれば個人記録に記入してもらっている。</p> <p>毎朝ミーティングを行い、利用者さんの様子やケアの方針についてなどをその日勤務の職員で確認している。</p>	◎	◎	◎	<p>入居前に、管理者が自宅に出向き、利用者や家族から、思いや意向などを聞いている。また、共用のデイサービスやショートステイの利用から、入居に繋がる利用者も多く、事前に情報を把握することができている場合もある。さらに、日々の生活の中で、利用者から思いなどを聞くこともあり、新たに聞いた情報は、アセスメントシートや個人記録等に記載し、職員間で情報を共有している。</p>
2	これまでの暮らしや現状の把握	<p>a 利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。</p> <p>b 利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。</p> <p>c 本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。</p> <p>d 不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)</p> <p>e 利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。</p>	<p>○</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p>	<p>ケアプラン作成の際は家族に連絡をとり、本人の様子や気持ちを伝えるようにしている。また家族の思いも聞き取るようにしている。</p> <p>申し送り記録や個人記録を利用して現状の把握と共有に努めている。また、月1で個々のモニタリングを作成し主治医、主治歯科医に情報提供している。</p> <p>変わったこと、対応に苦慮することなどは申し送りノートや個人記録などを活用して職員間で共有しており、さらに、月に1度のミーティングでも対応を検討している。</p> <p>変わったこと、対応に苦慮することなどは申し送りノートや個人記録などを活用して職員間で共有しており、さらに、月に1度のミーティングでも対応を検討している。</p>	◎	◎	◎	<p>入居前に、管理者が自宅に出向き、アセスメントシートを活用して、生活歴やこれまでの暮らし方、現状などの聞き取りをしている。また、以前利用していた介護サービス事業所や介護支援専門員から情報を聞くとともに、管理者等が退院時のカンファレンスに参加し、情報収集をすることもある。さらに、事業所では、厚生労働省の「ケアの質の向上に向けた科学的介護情報システム(LIFE)」の様式に対応するようになり、必要な情報を聞き取り、システム上に記録を残している。</p>
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	<p>a 把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。</p> <p>b 本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。</p> <p>c 検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。</p>	<p>◎</p> <p>◎</p> <p>◎</p>	<p>月1回のミーティングで各利用者への対応を見直している。またケアプラン作成時には家族にも連絡をとりケアの方向性について話し合っている。</p> <p>月1回のミーティングで各利用者への対応を見直している。またケアプラン作成時には家族にも連絡をとりケアの方向性について話し合っている。</p> <p>月1回のミーティングで各利用者への対応を見直している。またケアプラン作成時には家族にも連絡をとりケアの方向性について話し合っている。</p>	◎	◎	◎	<p>○ 事業所では、利用者が自宅のように、好きな時に好きなことができるような支援に努めており、利用者の意向を確認して、納得の上で様々な活動を行ってもらっている。月1回全体ミーティングを実施し、困難事例や原因などを職員間で話し合い、サービスの向上に繋げている。また、アセスメント情報をもとに、利用者や家族等の意見を取り入れて、利用者の視点で検討をしている。</p>

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	本人に直接意向を確認したり、本人が普段口に出している言葉、日々の様子を反映して計画を作成している。				事前に、利用者から意見を聞くほか、家族から電話等で意見や意向の聞き取りをしている。また、月1回利用者一人ひとりのモニタリング状況をまとめた資料を活用して、看護師から医師や歯科医師に情報を伝え、指示やアドバイスをもらうことができている。さらに、月1回の全体ミーティングにおいて、アセスメント情報をもとに、意見や指示を踏まえて、職員間で意見やアイデアを出し合いながら話し合い、計画担当者を中心に介護計画を作成し、管理者が確認をしている。重度の利用者には、事業所で穏やかに生活が送れるように、環境整備を取り入れた計画を作成をしている。加えて、家族の協力を計画の中に盛り込むこともあり、「家族に会いに来てもらい、楽しい時間を過ごす」などの目標を取り入れた計画を作成することもある。	
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	月1回のミーティングで各利用者への対応を見直している。またケアプラン作成時には家族にも連絡をとりケアの方向性について話し合っている。	◎	◎			
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	月1回のミーティングで各利用者への対応を見直している。またケアプラン作成時には家族にも連絡をとりケアの方向性について話し合っている。					
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	一部の家族の協力を盛り込んだ計画もできているが、ほとんどの計画は地域や家族の協力までは盛り込めていない。					
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	日誌にそれぞれの目標を記載し、毎日できたかどうかを評価している。				事業所では介護ソフトを導入するとともに、厚生労働省のLIFEの様式を活用するようになっている。中には、タブレットでの入力に慣れない職員がいたものの、概ね使いこなし、記録できるようになってきている。また、日誌には、はっきりとした短期目標を記載するとともに、個人記録の上段部分には、目標等を記載し、職員は計画の内容が確認しやすいようになっている。さらに、日々のサービスの実施内容は、○△×を付けて、実施の有無などを評価するとともに、毎月末には、総合的な評価を残している。加えて、個人記録には、普段と変わった様子を記載するよう努めており、発した言葉などの詳細まで記載するとともに、落ち着いて生活が送れている利用者には、記載内容が少なくなることもある。職員の気づきは、申し送り記録等に記載し、全体ミーティングで話し合うことができている。	
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	日誌にそれぞれの目標を記載し、毎日できたかどうかを評価している。また、毎朝、短時間のミーティングを行い、ケアの方針などを確認している。					
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	○	個別記録に気になることなどがあれば記入してもらうようにしている。状態が落ち着いている利用者については記録が少ないこともある。					
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	○	月1回のミーティングで各利用者への対応を見直している。その際に気づいたことやケアの変更があればミーティング記録に記録し、回覧して全職員で共有している。					
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	半年を基準にしてケアプランの見直しを行っている。				◎ 6か月間に1回を基本として、介護計画の見直しをしている。日々のサービス内容を○×等を付けて評価を行うとともに、月1回全体ミーティングの中で話し合い、利用者の現状を確認し、評価を残している。また、利用者一人ひとりを取りまとめたモニタリング情報を、医師や歯科医師へ情報提供を行い、アドバイス等をもらうことができている。さらに、入退院時や状態の変化があった場合には、現状に即した介護計画の見直しをしている。	
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	月1で個々のモニタリングを作成し主治医、主治歯科医に情報提供している。					
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	ユニットが変更になった場合、区分変更をした場合、入退院時にはケアプランを立て直すようにしている。					
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	◎	月1回は全職員を対象にしたミーティングを行っている。緊急案件がある場合は常勤ミーティングを行う。ミーティングができない場合でも管理者が常勤職員に意見確認は行う。				○ 日々の朝の申し送りで話し合うほか、夕方の申し送り時には、日誌等のノートを確認してもらい、申し送りをしている。また、毎月第2金曜日の13時30分から1時間程度、全体ミーティングを実施するとともに、終了後には研修会を実施している。ミーティングでは、職員間で共有を図り、統一したサービスの実施に繋げている。さらに、緊急案件のある場合には、常勤職員でミーティングを実施し、対応をしている。加えて、参加できない職員には、ミーティング記録を1週間、職員の仕事場に配置して、職員に確認してもらうとともに、重要事項等は、朝の申し送り等でも伝えている。	
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	◎	堅苦しくなく、それぞれが気づきや考え、経験を口に出せるような雰囲気でのミーティングを行っている。					
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	○	勤務の都合があるので全員の参加は難しい。なるべく多くの職員が参加できる日程で開催するように配慮はしている。					
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	○	ミーティング記録を1週間は職員が目を通せる場所に設置し、確認したらサインをしてもらうようにしている。また大事なことは朝のミーティングでも伝えていく。					
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容や方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	◎	毎朝ミーティングを行う、申し送り記録を記入する、記録にきちんと目を通す等のことを開設から皆で試行錯誤し、漸く「知らなかった」ということがなくなってきたところ。				○ 日々の朝・夕の申し送りを実施するほか、職員に日誌や申し送り記録等を確認してもらい、確実な情報伝達に繋げている。以前は、記録を確認せずに、職員から「知らなかった」などの声が聞かれていたが、職員間できちんと確認する雰囲気づくりができてきている。	
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	朝のミーティングや職員のグループラインなどを活用して情報伝達をしている。	○				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
(2) 日々の支援										
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	◎	買い物やカフェ、ドライブなど利用者から希望があれば応えるようにしているし、希望が伝えにくい場合も職員の手が空いたら表情が良くなることのできるような支援をしている。	/	/	/	重度化に伴い、利用者ができることが少なくなってきたものの、職員が声をかけて、可能な範囲で自己決定してもらえよう努めている。また、意思疎通が難しい利用者には、職員が表情や様子を観察しながら、笑顔などの表情を見逃さないように努めるとともに、穏やかな生活が送れるよう支援している。さらに、入浴時など、職員は利用者に声かけをするとともに、納得してもらえない場合には、説明などを行い、納得の上で行ってもらえるよう取り組んでいる。加えて、ドライブやレクリエーションなどをみんなで一緒にいき、笑顔や生き生きとした表情が見られるよう努めている。	
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	それぞれの希望や選択が尊重されるように支援している。	/	/	○		
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかるかに合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	◎	何事も利用者が納得したうえで実施するようにしている。(納得してできるように説明したり、声掛けの工夫をしたりしている。)	/	/	/		
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	できる範囲でそれぞれのペースに合わせた支援を行うようにしている。	/	/	/		
		e	利用者の活き活きた言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	全ての時間では難しいが、余裕のある時間帯には楽しめるように配慮して関わっている。	/	/	/		○
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	症状が進行していても、ある程度、安定して生活ができるように支援している。	/	/	/		/
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	年に数回、人権や尊厳に関する研修を行い、またセルフチェックなども行っている。OJTにおいても気が付けば管理者が注意を促すようにしている。	◎	○	○	月1回実施する全体ミーティングの後に、1時間程度研修会を実施し、人権や尊厳等をテーマに取り上げて、職員は学ぶことができています。また、定期的にセルフチェックを行うとともに、管理者が気になる場合には、該当職員に注意を促している。さらに、入浴時などには、同性介助に努めるとともに、プライバシーの配慮に努めている。加えて、居室の入室時には、利用者の声をかけてから入室するとともに、不在時にも、事前に「掃除で入ります」などの声をかけてから、確認の上で入室することができている。	
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	◎	利用者の尊厳に配慮してケアを行っている。	/	/	/		◎
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	◎	男性職員の介助での入浴に抵抗がある女性利用者については女性職員の介助で入浴できるように配慮するなどしている。	/	/	/		/
		d	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	入室の際には利用者により一言声をかけてから入室するようにしている。	/	/	/		○
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	年に1度は情報の取り扱いについての研修をおこなっており、セルフチェックでも大切さを自覚している職員が多いという結果が出ていた。	/	/	/		/
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けてもらったり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	利用者のできる家事や仕事をみつけてもらい感謝を伝えるようにしている。	/	/	/	洗濯物干しやたたみ、皿洗い、モップがけ、新聞たたみなど、利用者ができることを手伝ってもらい、職員は感謝の言葉を伝えている。また、他の利用者の車いすを押したり、他の利用者の洗濯物をついでに、居室へ運んだり、下膳を行うなど、利用者同士で助け合いや支え合う場面も見られ、職員は安全に配慮した見守りをしている。さらに、利用者同士がトラブルを起こすこともあり、配席を配慮したり、早期に職員が利用者同士の間に入りたりするなど、未然にトラブルの防止に努めている。	
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	◎	利用者が利用者を支えようとしている際はむやみに手出しすることなく、安全に配慮して見守るようにしている。	/	/	/		/
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらおう場面をつくる等)。	◎	喧嘩にならないように、一方的にきつい言葉をかけられないように生活動線などを配慮している。仲の良い利用者同士で寛いで過ごせるように心がけている。	/	/	/		○
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者に不安や支障を生じさせないようにしている。	◎	利用者同士でのトラブルになりそうなどは事前に予防するように配慮している。	/	/	/		/

愛媛県グループホームさくらや

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	○	入所前に聞き取りをしている。また入所前からデイサービスを利用している場合には在宅での人間関係もサービス担当者会議なので把握できる。	/	/	/	
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	入所前に聞き取りをしている。また入所前からデイサービスを利用している場合には在宅での人間関係もサービス担当者会議なので把握できる。	/	/	/	
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	なるべく生活していた地域にもドライブなどで足を運べるように工夫している。しかし、コロナ禍で関わりは難しい。	/	/	/	
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	色々な人が面会に気軽に来れるように配慮しているが、コロナ禍で妨げられたことも多い。	/	/	/	
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない)(※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	◎	週に3回近隣の社協さんに共有スペースをかりてカフェを開催している。カフェでの時間が利用者の楽しみになっている。ドライブも頻繁に出かけているし、希望者は買い物にも行っている。	○	◎	◎	コロナ禍において、外出できる機会は減少しているものの、感染状況を見計らいながら、ドライブに出かけたり、事業所周辺を散歩したりするなど、日常的に外出できるよう支援している。中には、自分で鍵を開けて自由に外に出て、近隣にある鳥小屋に行き、水や餌をやるなどの世話をしたり、近隣の草引きをしたりする利用者もいる。また、天気の良い日には、テラスに出て、日光浴や外気浴を行い、気分転換をしている。さらに、事業所より少し高台にある町のひまわり百年館を活用して、週3回、「さくらカフェ」を運営し、利用者と一緒に歩いて出かけ、コーヒーやお茶などを飲むことが利用者の楽しみの一つとなっている。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	◎	カフェはボランティアスタッフが運営してくれている。	/	/	/	
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	◎	状態に関わらず、本人が希望すればさくらカフェやドライブに出かけている。テラスで日向ぼっこをして過ごすこともある。	/	/	◎	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	△	コロナ禍において地域の人や家族との外出はかなり制限されている。	/	/	/	
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	◎	年に数回は認知症についての研修会を実施している。また、困ったことが起きると職員間で話し合い、何が原因なのか、どう対応するのが良いかを話し合っている。	/	/	/	月1回実施する研修会で、職員は認知症のことを学び、理解している。全体ミーティング等を活用して、困難事例や困ったことを職員間で話し合い、対応方法などを検討して統一したサービスの実施に努めている。また、日々の生活の中に、散歩やテレビ体操、口腔ケア体操などを取り入れ、利用者の心身機能の維持に努めている。さらに、洗濯物干しや草引き、ニワトリの世話など、できることを利用者は手伝っている。加えて、重度化しても、利用者にタオルたたみなどのできることを手伝ってもらうなど、可能な範囲で、できることをしてもらえよう環境づくりに努めている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	理解しているし、なるべく生活動作で機能維持ができるように支援している。	/	/	/	
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	◎	できることが少なくなってきた利用者に対してでもできることを探して取り組めるように支援している。	◎	/	◎	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	◎	それぞれのできること、得意なことは把握して取り組める機会を持てるように支援している。	/	/	/	洗濯物干しやたたみ、血洗い、モップがけ、新聞たたみ、鳥の世話、草引きなど、日々の生活の中で、職員は利用者一人ひとりの役割や出番づくりに努めている。また、認知症状の進行で、利用者の理解が難しく、反応が遅くても、職員は分かりやすく説明するとともに、遅くても待つ介護に努めている。コロナ禍においても、裁縫を活用したマスクづくりやふきんづくりを行い、安価で販売するなど、利用者の励みにも繋がっている。さらに、ひよこやニワトリを育てたり、近隣の草引きをしたりするなど、少しでも楽しみや張り合いが持てるような支援に努めている。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	障害のレベルが進んでできることが少なくなってきたりもなるべく穏やかに過ごせるように支援している。	◎	○	◎	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	◎	マスクを作ったり、鶏の説明を小学生にしたり、近隣の草むしりをしたりできるように支援している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	○	自分で服を選べる利用者には自分の好きな服を選んできている。				毎朝、自分で服を選んだり、髭剃りをしたりする利用者もいる。重度化等に伴い、食事の際に食べこぼしが多くなった利用者が、自らエプロンの着用を希望し、着用できるよう支援している。また、汚れが見られた利用者には、居室で服を着替えてもらうなどのフォローをしている。さらに、美容学校に通う学生の帰省時に、散髪をしてもらい、整容を整えることもある。加えて、重度な利用者にも、以前の好みの服を着られるよう支援するほか、着やすさや肌触りの良い物などを着用してもらい、本人らしさが保てるよう支援している。
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるように支援している。	◎	希望する方には美容室を予約して美容室にて散髪してもらっている。				
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	職員が適切で過ごしやすい服を選んでいる。				
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	◎	出掛ける際は、少しおしゃれな服などを選んで着られるように支援している。				
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にさりげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	できるかぎりそのようにしている。	◎	○	○	
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	◎	希望する方には美容室を予約して美容室にて散髪してもらっている。				
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	施設内においても美容師の卵の学生にボランティアで髪を切りに来てもらうことがある。			○	
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	理解しており、食事の時間が楽しみであるように支援している。				管理栄養士資格を持つ施設長を兼ねる代表者が、1か月単位で、昼食と夕食の献立を作成するとともに、1週間単位で朝食の献立を作成をしている。1週間分の食材を施設長がまとめて買い物に行くとともに、不足の食材などを職員が買い足し、利用者に調理の下ごしらえや下膳などを手伝ってもらいながら、昼食と夕食は調理がメインの職員が調理をしている。朝食は、夜勤の職員が交代で調理するとともに、朝5時過ぎには準備を行い、利用者の起床時間などのリズムに合わせて、食事を摂ることがができる。また、近隣住民から差し入れていただいた果物や野菜が食卓に上ることもある。アレルギーや薬の副作用のある利用者には、代替えの食材を用意している。利用者の状態に応じて、刻みや一口サイズなどの食事形態にも対応している。以前は、食事の際に、同じ食卓を囲み、同じ物を食べていたが、コロナ禍において、職員は別のテーブルで、同じ物を食べるようになってきている。さらに、とんど焼きの際には、さつまいもを焼いて食べたり、お好み焼きと一緒に焼いて食べたりするなど、利用者が食事を楽しむことができるよう工夫している。加えて、重度な利用者もフロアに出て、調理の匂いや音を感じる事ができている。管理栄養士から、調理の指示をもらうこともできている。
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	○	足りない食材の買い足しなどにお使いをお願いすることもあり、後片付けも利用者にも協力してもらっている。			○	
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	足りない食材の買い足しなどにお使いをお願いすることもあり、後片付けも利用者にも協力してもらっている。ただ、重度化してきており、年々できることが減ってきている。				
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	苦手なものが具体的にある場合は職員間で情報共有している。				
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔ながらの味を取り入れている。	○	行事食はお正月ぐらいしかないが、地域の人の差し入れなどで旬の野菜や果物が食卓に上ることは多い。			○	
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	嚥下能力に合わせて安全に食べられる食形態にできるだけ調整して、本人が食べたいと思える状態で提供している。				
		g	茶碗や湯飲み、箸等使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	△	食器やお箸は共有のものを使っている。麻痺等で力が弱い利用者にはプラスチック製の軽い食器を用意している。			○	
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなく行っている。	△	コロナ禍で席を共にして食事をするのは避けている。			○	
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	お好み焼きの献立の場合は各ユニットで焼くのでユニットの中がお好み焼きの良い匂いでいっぱいになる。他にも献立の説明をしたりすることもある。	◎		○	
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	毎日の排便、排尿の状態を確認し、月1度の体重測定で栄養バランスやエネルギー量、水分量が十分かどうかを検討している。				
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	おやつやカフェのタイミングなどを利用してエネルギー量や水分量を調節している。				
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	◎	管理栄養士が献立を立てており、調理の職員が調理方法などで意見があれば栄養士に伝えるようにしている。			◎	
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	年に1度は感染予防についての研修もしているし、食中毒の予防には配慮している。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	年に1度口腔ケアについての研修を行っている。				歯科衛生士の資格を持つ職員が勤務するようになり、必ず月1回以上、利用者一人ひとりの口腔内の状況の確認と評価を行い、記録に残すことができています。また、職員が口腔ケア体操のDVDを作成し、食事前には口腔ケア体操を実施するようになっている。さらに、毎食後、職員が利用者に声をかけ、順番に洗面台へ誘導をして、口腔ケアを実施している。加えて、異常が見られる場合には、歯科衛生士の資格を持つ職員の判断で、歯科医の往診に繋げるとともに、月1回歯科医に利用者一人ひとりのモニタリング状況の情報提供を行い、アドバイスを受けている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	◎	歯科衛生士の資格を持つ職員に月に一度口腔内の評価をしてもらっている。			◎	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	◎	年に1度口腔ケアについての研修を行っている。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	◎	口腔ケアの声掛けは毎食後に必ず行っており、それぞれの利用者の能力に応じた支援を行っている。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	○	毎食後にならず口腔ケアの声掛けを行い、必要な人には介入しているが、自分の歯が残っている方の歯磨きの介入が難しく、磨き残しなどがある。			◎	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医を受診するなどの対応を行っている。	◎	入れ歯の不具合や口腔内の状況に応じて歯科衛生士の判断で歯科医受診の援助を行っている。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	なるべく自立排泄できるように支援している。				事業所では、利用者が自立した排泄ができるよう努めているものの、重度化などに伴い、半数以上の利用者は、排泄介助が必要となってきている。布パンツで生活できている利用者があるものの、ほとんどの利用者はリハビリパンツか、テープタイプのおむつを使用している。また、職員は個別記録等で排泄パターンを把握し、声かけやトイレ誘導をしている。さらに、おむつやパッドなどの排泄用品の使用時には、管理者と計画作成担当者、看護師で話し合い、適切な排泄用品を選択し、家族に確認の上で使用している。加えて、さくらカフェまで散歩するなどの便秘対策に取り組むことができていたものの、コロナ禍の再拡大において開催を自粛し、目的を持った散歩ができていないため、便秘の利用者が増えてきている。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	理解している。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	概ね把握している。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	◎	布パンツからリハビリパンツに変更する場合は職員間でそれが適切かを協議するようしており、パッドの種類も排泄の状況や個人の能力に合わせて複数の職員で検討して決めている。	◎		◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	なるべくトイレできちんと排泄できるように心を砕いている。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	利用者の様子を観察して声掛けを行うようにしている。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういつ時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	◎	布パンツからリハビリパンツに変更する場合は職員間でそれが適切かを協議するようしており、パッドの種類も排泄の状況や個人の能力に合わせて複数の職員で検討して決めている。大きく変更する場合は家族にも相談し、本人とも話をする。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けている。	◎	状態に合わせて布パンツ、リハビリパンツ、テープタイプのオムツを使い分けており、パッドの種類も数種類を使い分けている。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	便秘にならないように体操したり歩いたり動いたりするようにしている。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるように支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	○	曜日、時間帯は決まっているけれど、その中でなるべく利用者一人ひとりの希望に沿った入浴ができるように支援している。原則週3回は入浴するようにしている。	◎		◎	利用者は、週3回入浴をすることができる。午前9時から午後2時30分までの利用者の入りたい時間帯を確認しながら、湯船に浸かる時間や湯温などの希望を聞き、柔軟に対応をしている。利用者の希望に応じて、可能な範囲で同性での入浴介助の対応をしている。また、事業所では、利用者に納得してもらったうえで入浴支援に努めており、入浴拒否のある利用者にも、声かけや説明を行い、翌日に入浴日を変更したり、別の職員や時間を変えて声かけをしたり、うまくいったパターンを職員間で共有するなどの工夫をしながら、週2回入浴してもらうことができています。さらに、湯船に浸かることのできない重度の利用者には、清拭のほか、週1回のシャワー浴や足浴の対応をすることもある。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分が入浴できるよう支援している。	○	本人が望めば身体機能が低下していてもなるべく安全に浴槽浴ができるように支援している。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	本人が望めば身体機能が低下していてもなるべく安全に浴槽浴ができるように支援している。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強ひせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	◎	拒否があったとしても入浴の無理強ひはせず、本人が納得した状態で週2回は入れるように努力している。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	血圧や発熱の有無、そのほか、その日の様子や顔色などにも注意して観察し入浴の可否を判断している。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	◎	夜間の様子を記録を記録しており、寝られない利用者の原因は職員で話し合い原因を検討するようにしている。	/	/	/	認知症の進行等に伴い、昼夜が逆転した利用者が1階に数名いるものの、他の利用者に影響を及ぼさない範囲で、自由に生活を送ってもらっている。時には、夜間に眠れない利用者もあり、職員と一緒に茶を飲んだり、おしゃべりをしたりするなどの対応をしている。中には、体調面を考え、医師に相談して眠剤を服薬している利用者もいる。また、日々の体操や散歩などの活動を取り入れ、夜間に安眠できるよう努めている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	◎	昼夜逆転しないように日中のお昼寝の時間などは職員でコントロールしており生活リズムを整えている。	/	/	/	
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	◎	昼夜逆転しないように日中のお昼寝の時間などは職員でコントロールしており生活リズムを整えている。	/	/	/	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	昼夜逆転しないように日中のお昼寝の時間などは職員でコントロールしており生活リズムを整えている。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	電話をかけたい利用者の希望があれば電話ができるように支援しているし、年賀状は出すようにしている。	/	/	/	/
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	電話をかけたい利用者の希望があれば電話ができるように支援しているし、年賀状は出すようにしている。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	電話をかけたい利用者の希望があれば電話ができるように支援しているし、年賀状は出すようにしている。	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	プレゼントが届いた場合は電話で連絡ができるように支援している。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらおうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	必要がある場合はそのようにしている。	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	理解しているし、買い物ができる利用者には買い物の支援を行っている。	/	/	/	/
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	○	定期的に買い物に出かけている利用者もいる。	/	/	/	
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	◎	利用者も近くのマートで買い物をすることがあり、店側にも理解してもらっている。	/	/	/	
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	○	入所時、家族、本人と相談して決めている。	/	/	/	
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	入所時、家族、本人と相談して決めている。	/	/	/	
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしておき、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	入所時に1万円を預かっており、月での利用金額を明細にして家族に報告するようにしている。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々々のニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	なんでも請け負うことはしないが、家族の状況やご本人の状況に合わせて柔軟に対応はしている。	◎	/	◎	事業所では、利用者や家族の希望に応じて、可能な範囲で、柔軟な対応に努めている。また、病院への受診はなるべく家族に協力をお願いしているものの、家族の高齢化等の状況に応じて、職員が同行支援をすることもある。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(3)生活環境づくり									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	寒い間は玄関は網戸にして気軽に入ってこれるようにしている。	◎	○	○	事業所は、地域住民に認知されており、果物や野菜などの差し入れを持ってきてくれることも多い。地域住民が作成した押し花などの作品を、事業所内に展示協力することもある。
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていないか等。)	◎	施設という雰囲気がでないように配慮している。利用者の制作物もむやみやたらと飾らず、時期が過ぎたら速やかに片づけるようにしている。	◎	○	○	事業所の2階フロアの窓から、瀬戸内海の絶景を眺めることができる。2階の共用空間には畳スペースがあるほか、1階にはテラスもあり、いすやソファも置かれ、利用者は思い思いの場所で寛ぐことができる。また、壁面の一角にある決められたボードには、季節の折り紙などの作品が貼られているほか、生花などが飾られている。さらに、事業所内は掃除が行き届き、イオン発生装置も設置され、清潔感があり、快適な空間となっている。加えて、事業所前の道を挟んで、鶏小屋があり、利用者は水や餌やりなどの世話をしている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	臭いには配慮している。またテレビの音量なども不快にならないように注意している。				
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	季節の掲示ができる掲示板を設置しており、折り紙や編みぐるみなどを季節ごとに掲示するようにしている。				
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	◎	気の合う利用者同士が一緒にテーブルにつけるようにテーブルのサイズや配置を検討している。				
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	◎	そのようにしている。				
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのもので活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	◎	それぞれの居室は本人が混乱せず、安全に過ごせるように家族とも相談して置くものを検討するようにしている。	◎		◎	事業所には、仕切りをはずすと2人部屋として使用できる居室もある。居室には、ベッドやたんす等が備え付けられているほか、馴染みの物を持ち込み、利用者に合わせて空間づくりをしている。また、職員が居室内のこまめな清掃や換気を行っている。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	◎	居室やトイレには表札をつけるようにしている。またテラスへの出入り口は自分で出入りできる能力がある方は自由に出入りできるように配慮している。			◎	自分の居室の認識ができるように、名前を大きく分かりやすく表示している利用者もいる。また、掃除道具やパズルなど、利用者が自由に手に取れるようにしている。
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	利用者が触っても問題ないものは自由に扱えるように配置し、反対に触ると困るものについてはこまめに収納するように配慮している。				
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ぼうき、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	◎	パズルや掃除道具などはそれぞれが自由に持って動けるように決められた場所に配置してある。				
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)	◎	外に出ても自分の判断で施設まで戻って来られる利用者については自由に施設周辺を散策できるようにしている。近隣住民の方にも見守りをお願いしている。出入りは施錠しているが、利用者でも開けられるものになっている。	◎	◎	○	身体拘束などの研修会を実施し、職員は鍵をかけることの弊害を理解している。事業所には、不穏な利用者もおり、事業所前に池があることから、日中には玄関の施錠をしているものの、利用者自身の判断で、玄関の鍵を開けて外出する利用者もいる。時には、開放していることで、職員が利用者を探すこともあるものの、近隣住民や社協職員、ゲートボールをしている方から連絡をもらうことができています。利用者の安全面等を考えて、玄関等の施錠をすることは事業所の考え方で仕方のない部分はあるものの、利用者や家族の理解が得られるとともに、外出したい利用者への対応をするなど、職員が理解と認識をした上で支援が行われることを期待したい。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	◎	外に出ても自分の判断で施設まで戻って来られる利用者については自由に施設周辺を散策できるようにしている。近隣住民の方にも見守りをお願いしている。出入りは施錠しているが、利用者でも開けられるものになっている。				
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)。	◎	外に出ても自分の判断で施設まで戻って来られる利用者については自由に施設周辺を散策できるようにしている。近隣住民の方にも見守りをお願いしている。出入りは施錠しているが、利用者でも開けられるものになっている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	新規利用者は入所月のミーティングで情報共有しているし、変化がある利用者についてもミーティングや申し送りで情報共有している。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	毎日のバイタルチェックの他にも気になることがあれば個人記録や申し送りに記録するようにしている。また、体調に関して緊急を要する指示がある場合はグループラインなども活用している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	オンコールで24時間看護師が対応してくれている。また夜間の急変などは岩城診療所の医師も対応してくれる。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	島内の病院の場合は受診や往診で対応している。島外の病院を受診を希望する場合は家族にお願いして受診してもらっている。家族が対応できない場合は必要であれば職員対応で島外の病院を受診することもある。		◎		
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	島内の病院の場合は受診や往診で対応している。島外の病院を受診を希望する場合は家族にお願いして受診してもらっている。家族が対応できない場合は必要であれば職員対応で島外の病院を受診することもある。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	島内の病院の場合は受診や往診で対応している。島外の病院を受診を希望する場合は家族にお願いして受診してもらっている。家族が対応できない場合は必要であれば職員対応で島外の病院を受診することもある。結果は家族と共有するようにしている。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	かならず地域連携室にサマリーを送るようになっている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	地域連携室と入院前、入院中と細かく連絡をとるよう心がけている。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	△	特別な取り組みはしていないが、研修などで顔を合わせるときには挨拶をするようにしている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	月に1度、利用者の状態をモニタリングしたものを岩城診療所と岩城歯科診療所に提出しており、診療所では看護師が、歯科診療所では歯科衛生士がそれぞれに医師と気になる利用者については意見交換している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	看護師が24時間オンコール体制をとっている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	そのようにしている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	◎	看護師が直接、またはスマートフォンなどの通信を利用してこまめに説明、指示をしている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	ダブルチェックができるように仕組みを作っている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	そのようにしている。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	月に1度、利用者の状態をモニタリングしたものを岩城診療所と岩城歯科診療所に提出しており、気になる利用者については医師と意見交換している。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	入居時には看取りや重度化した場合の説明をしている。また、体調の変化については家族に都度説明をし、選択肢を提示するようにしている。	/	/	/	事業所には、「重度化した場合の対応に係る指針」があり、入居時に家族に説明している。事業所では、今年度も看取り支援の経験があり、看取り支援後にはデスカンファレンスを行い、職員間で振り返りなどの話し合いをしている。また、家族には居室の片づけ時等にも状況を伝え、感謝されている。重度化した場合には医師を交えて家族と話し合い、方針を共有している。さらに、事業所の看護師や診療所の医師と24時間体制で連絡を取ることができ、職員は安心感がある。加えて、事業所での看取り支援を希望していても、病院や施設へ転院する利用者もいる。	
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	重度化、終末期を迎えた利用者の家族の意向については診療所の医師とも情報共有するようにしている。また、家族にも直接診療所で医師と話し合うことを進めるようにしている。	○		◎		
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	◎	家族の思いはもちろん、職員の思いや力量、利用者の状態や思いを勘案して医師と相談しながら方針を決めるようにしている。	/	/	/		/
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	◎	出来る限り丁寧に納得と理解を得られる説明をするように心がけている。	/	/	/		/
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	そのようにしている。	/	/	/		/
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	◎	家族も後悔をしないように関わりを継続できるように支援するようにしている。	/	/	/		/
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	◎	年に一度は感染症についての研修を行うようにしている。細かいことは感染が増えている時期などにはミーティングなどでも注意喚起するようにしている。	/	/	/		
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	年に一度は感染症についての研修を行うようにしている。細かいことは感染が増えている時期などにはミーティングなどでも注意喚起するようにしている。	/	/	/		
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	○	特にコロナウイルス感染症やインフルエンザに対しては最新情報に注意するようにしている。	/	/	/		
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	○	社協や健康推進課、他の法人とも情報交換して対応を検討するようにしている。	/	/	/		
		e	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	○	そのようにしている。	/	/	/		

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
II. 家族との支え合い									
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	できる家族とできない家族とに分かれている。				コロナ禍において、事業所では面会制限を設けているものの、県内の感染縮小期には、テラスやロビーを活用して、早期の家族との面会対応をしている。中には、SNSのテレビ電話機能を活用し、家族と連絡している利用者もいる。事業所には家族会があり、コロナ禍以前は年2回開催し、普段の利用者の様子を見てもらうほか、管理者等から細かな制度などの説明や外部評価のサービスの評価結果の報告、食事会、個別面談を行うことができていたが、現在は開催を自粛している。また、契約時に気軽に相談できることを伝えているものの、家族からの連絡は少ない。さらに、月1回さくら便りを送付して利用者の生活の様子を伝えるほか、介護計画の見直しの時期には、家族に連絡し、意見や意向を聞いている。加えて、事業所では頻りにブログを更新し、契約時に同意を得た利用者の写真などの情報を伝え、家族から喜ばれている。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	なるべくそのようにしているが、コロナ禍のため難しい側面も多い。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	○	コロナ禍もあり難しいところも多くなるべくそのようにしている。			○	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	ブログの更新、月一回のさくら便り、半月に1度の計画の見直しでの連絡などでこまめに様子を伝えるように努力はしている。		◎	○	
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的な内容を把握して報告を行っている。	○	なるべく家族の意向も聞き取るように意識している。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	計画の見直し時などに細かくケアの方針や本人の状態を説明するようにしているが、コロナ禍で面会が難しいこと、一緒に実際に過ごせる時間が短いため実際の状態が伝わりにくいことが多い。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	月1のお便りでお知らせをするようにしているが、家族会が開催できていないので一方通行のお知らせできず伝わっているかよくわからない。			○	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	×	コロナ禍でできていない。				
		i	利用者一人ひとり起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	計画の見直し時などに細かくケアの方針や本人の状態を説明するようにしているが、コロナ禍で面会が難しいこと、一緒に実際に過ごせる時間が短いため実際の状態が伝わりにくいことが多い。				
		j	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的にやっている。	○	面会に来た時やちょっとした連絡のときに話をするようにしているが、家族によって偏りがある。			○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	○	契約時には契約書の全項目を分かりやすい言葉に言い換えたり具体例をあげながら読み合わせしてから締結するようにしている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	退去理由に家族の納得を得てから退去先の手配などを始めるようにしている。退去先がきちんと決まるように支援もしている。こちらから退去をお願いする場合には家族には不満もあるだろうがトラブルにはなっていない。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	変更したときは家族会で報告し同意を得て改定を実施した。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	◎	茶話会やカフェを主催して施設についての説明や施設内の様子などを説明して理解を得られるようにしている。	/	◎	/	コロナ禍以前は、利用者と一緒に小学校の運動会や持久走の応援などの地域行事に参加したり、自治会の会合や地域清掃などに協力したりすることができていた。管理者を含めて、ほとんどの職員が地元に住んでおり、顔見知りの地域住民も多く、事業所は地域に認識されており、利用者が一人で歩いていると連絡をもらうなどの見守り体制もできている。また、事業所では、小学2年生の「まちたんけん」に協力したり、中学生の頃からつながりのある高校生のボランティアのほか、お話しや散髪などのボランティアを受け入れに協力することができ、交流を深めることができています。さらに、地域で、さくらカフェやさくら浜カフェ、さくら茶話会を開催するなど、地域住民が集える場を提供することができている。さくら浜カフェは、事業所から職員が参加しなくても、地元の方の協力のみで運営できるようになってきている。加えて、保健センターへの行く時に地域住民が事業所へ立ち寄ってくれるほか、果物や野菜などの差し入れを持ってきてくれることも多い。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	◎	茶話会やカフェを主催して地域の理解を得られるようにしているし、近くにある小学校とも交流できるように取り組んでいる。	/	○	◎	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	○	小学校や近隣の住人、ゲートボールをしている地域の人や社協の職員が見守ってくれている。	/	/	/	
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	○	コロナ禍で外部の人の来所はお断りしている。	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	◎	散歩やお出掛けなどでは気軽に声をかけてもらったりおしゃべりしたりしている。	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	◎	散歩やお出掛け先のカフェの運営、利用者の話し相手などボランティアの方に色々支えてもらっている。	/	/	/	
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	◎	ボランティアが運営しているさくらカフェで地域の人たちと交流することができており利用者の大きな楽しみになっている。	/	/	/	
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	◎	買い物やお散歩が安心してできるように地域の方の理解を得られている。施設周辺で好きなことをしている利用者も地域の人たちに見守られて好きなことができています。小学校とも楽しく交流できています。	/	/	/	
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	◎	今年度は運営推進会議の開催を奇数月第二火曜日と固定したので都合が悪く来られない方も居たけれど地域の方や家族会代表もできるかぎり参加してくれた。	x	/	△	運営推進会議は、利用者や家族、地域住民、ボランティア、社協職員、町担当者等の参加を得て開催をしている。会議の開催は、奇数月の第二火曜日に固定をしている。また、コロナ禍の状況を見極めながら、可能な限り、集合形式の会議開催に努めている。書面開催においても、可能な範囲で資料を参加メンバーに手渡し、意見があれば電話等で意見を連絡してもらいように伝えている。利用者家族等アンケートの結果から、運営推進会議への十分な理解を得ることができていないことがうかがえるため、今後は会議録を家族に送付したり、コロナ禍の終息後の家族会の開催を活用して説明をしたりするなど、家族の理解が得られるような取組みを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実績、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告している。	◎	資料をつくって報告しており、欠席者にも配布するようにしている。	/	/	○	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	◎	取り組みについて地域や有識者から意見をもらい、取り組みに活かすようにしている。また、次の会議のときに経過の報告などもするようにしている。	/	◎	○	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	△	今年度は開催日を固定したので欠席者が例年に比べて多かった。	/	◎	/	
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	△	公表していることを周知していない。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	◎	そのようにしている。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	機会があれば伝えるようにしている。	○	◎		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者:基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	◎	月に一度は研修を開催しているし、外部研修も受けられるよう声掛け、支援している。				週1回程度、代表者が1週間分の食材の買い物を兼ねて来訪することがあるものの、ほとんどの運営は管理者に任されている。事業所では、全体ミーティングの後に、月1回研修会を実施して、職員のスキルアップに努めているほか、外部研修にも参加できるよう支援している。また、管理者は、職員の退社のタイムカードを押す時に声をかけ、職員の話を聞くとともに、相談にも応じている。さらに、職員は管理者に話やすく、幅広い年代の職員同士の良好な関係ができています。加えて、事業所では勤務シフトなどの交代も柔軟に対応してくれ、職員は働きやすい職場環境と感じており、職員の離職率も低い。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	計画的には行っていないが、スキルアップできるように配慮はしている。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	そのようにしている。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	コロナ禍で機会は減っているがそのようにしている。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	そのようにしている。		◎	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	研修を行い理解を深めている。				毎月実施する研修会の中で、虐待防止などを取り上げて、職員は学んで理解をしている。気になることがあれば、日々の朝の申し送りなどを活用して、話し合いをしている。また、不適切な言葉づかいが聞かれた場合には、管理者から個別に該当職員に注意喚起をするほか、職員同士でも注意し合えるようになってきている。さらに、年1回虐待防止などのマニュアルを職員間で読み合わせを行い、詳細な内容を確認している。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	◎	毎朝のミーティングで気になること、記録の内容などで小さな問題も話し合っている。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見逃されることがないように注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	年に一度マニュアルについて確認するようにしている。				
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	終業時に面談をしたりするようにして配慮している。				
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	年に2回は研修を行っているし、日々の業務の中でも確認するようにしている。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	ミーティングや日々の申し送りのなかで点検できる機会を設けているし、話し合いも行っている。				
		c	家族等から拘束や施設への要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	◎	ミーティングや日々の申し送りのなかで点検できる機会を設けているし、話し合いも行っている。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを理解している。	△	研修など理解を深める取り組みはしているが、知識として定着していない。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	○	地域で主催しているカフェなどで啓蒙活動を行っている。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	相談があれば窓口につなぐようにしている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	マニュアルを確認したり、救命講習の際に確認したりしている。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	救命講習などで年に数回、訓練できるようにしている。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	そのようにしている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	そのようにしている。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	△	苦情対応マニュアルはなく、苦情は管理者に上げるようにしている。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	◎	そのようにしている。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	◎	そのようにしている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	職員が利用者の要望を聞くことが主だが、内容によっては施設長や管理者が利用者と個別に話をして意見や思いを聞くこともある。			○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見や要望を聞くよう努めているものの、利用者から出される意見は少なくなってきた。家族からは、「面会制限の解除をしてほしい」などの意見は聞かれるものの、家族会の開催ができていないため、意見は少なくなってきた。また、管理者は、日々の退社時に職員に声をかけ、小さいことでも相談に応じるとともに、利用者のサービスの向上に繋がる意見は積極的に受け入れ、アドバイスなどを行っている。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	コロナ禍前は家族会でそれぞれの家族から直接意見を聞く機会が年に2回あったけれど、今は面会のときと計画見直しの際の電話でしか聞けないので少し不足しているかもしれない。	◎		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	△	そのような機会はない。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	△	週に1回は施設にきているが滞在時間が短いので十分ではないかもしれない。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	ミーティングや申し送り、終業後の面談などでなるべく意見をきくようにしている。			◎	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	自己評価の項目は職員にも研修などで伝える機会を設け、部分的に自己評価に参加してもらっている。				外部評価の自己評価は、職員の意見を取り入れ、管理者が作成をしている。外部評価のサービスの評価結果は運営推進会議の中で報告を行うほか、全体ミーティングなどを活用して、全ての職員に周知することができる。また、評価結果から、目標達成計画を作成するとともに、職員全員で目標達成に向けて取り組み、サービスの向上に繋げることができている。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	◎	評価の結果はミーティングでフィードバックし、サービス向上に努めている。				
		c	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	◎	評価の結果はミーティングでフィードバックし、サービス向上に努めている。				
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	◎	運営推進会議の中で評価の結果や今後の取り組み目標などは説明するようになっている。	○	○	○	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	評価結果を伝える時に前年に掲げた目標の評価も伝えるようになっている。				
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	○	マニュアルを作成し、玄関に掲示している。				事業所では、利用者と一緒に火災や地震、水害を想定した避難訓練を実施している。訓練では、実際に2階への垂直避難の訓練を行い、課題等を確認している。また、コロナ禍以前は、運営推進会議に合わせて、避難訓練を実施することができていたものの、コロナ禍において、事業所のみで訓練を実施することができていたものの、コロナ禍において、事業所のみで訓練を実施している。さらに、事業所として、地域の防災訓練に参加協力をすることができていた。事業所便りを活用して家族に報告できているものの、利用者家族アンケート結果からは、全ての家族にまでは十分に伝わっていないことがうかがえるため、コロナ禍の収束後には家族会などを活用して報告したり、家族に訓練への参加協力を呼びかけたりするなど、家族に理解が得られる取り組みを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	年に数回、マニュアルにそった訓練をしマニュアルを改定している。				
		d	消火設備や避難経路、保管している非常用食料・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	そのようにしている。				
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	地域の避難訓練には参加するようになっているが、コロナ禍で2年ほど地域の避難訓練が中止されている。	×	○	○	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	△	地域の避難訓練には参加するようになっているが、コロナ禍で2年ほど地域の避難訓練が中止されている。				
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	◎	地域の人向けに月に1回の勉強会や週に1回のサロンを開催して啓蒙活動に取り組んでいる。小学校でも認知症についての授業をさせていただいた。				事業所として、地域住民から相談があった場合は快く対応をしている。事業所では、家族に配布する事業所便りのほかに、年4回地域へ配布用の事業所便りを発行し、地域住民に新聞の折込チラシで事業所の取り組みを周知するなど、地域住民から認識されるようになってきている。月1回、商工会議所を活用して、地域住民も参加できる「さくら茶話会(認知症カフェ)」を開催し、認知症などの相談支援をすることができている。また、一昨年から地域住民も集える「さくら浜カフェ」を開催しているほか、新たに介護者の家族の会等から、地域に集える場づくりの相談があり、現在検討をしている。さらに、小学生の「町たんけん」や高校生のボランティアの受け入れに協力するとともに、町行政や地域包括支援センター、社協等との連携を図ることができている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	サロン等で相談窓口や介護保険の使い方の説明をしているし、職員が個別に地域で相談を受けることもあるようだ。		△	○	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	◎	コロナ禍で事業所は解放していないが、商工会議所や開発センターを利用して地域の集いの場を作っている。				
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	△	保健センターにきた実習生の見学や小学生のまちたんけんには協力している。				
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	○	そのようにしている。			◎	

(別表第1)

サービス評価結果表

サービス評価項目

(評価項目の構成)

I.その人らしい暮らしを支える

(1)ケアマネジメント

(2)日々の支援

(3)生活環境づくり

(4)健康を維持するための支援

II.家族との支え合い

III.地域との支え合い

IV.より良い支援を行うための運営体制

ホップ 職員みんなで自己評価!
ステップ 外部評価でブラッシュアップ!!
ジャンプ 評価の公表で取組み内容をPR!!!

ーサービス向上への3ステップー

【外部評価実施評価機関】※評価機関記入

評価機関名	社会福祉法人 愛媛県社会福祉協議会
所在地	愛媛県松山市持田町三丁目8番15号
訪問調査日	令和 4 年 2 月 4 日

【アンケート協力数】※評価機関記入

家族アンケート	(回答数) 11名	(依頼数) 18名
地域アンケート回答数	9名	

※事業所記入

事業所番号	3893200034
事業所名	グループホームさくらや
(ユニット名)	わかば
記入者(管理者)	
氏名	森崎 阿里
自己評価作成日	令和 3 年 12 月 27 日

<p>【事業所理念】 我が家のようにゆったりほっこり</p>	<p>【前回の目標達成計画で取り組んだこと・その結果】 ○地域での認知症についての勉強会や介護相談などの取り組みを運営推進会議の中で丁寧に説明している。今年は運営推進会議を前年にくらべると頻回に対面で開催できたので取り組みの内容が伝わったのではないかと感じている。 ○避難訓練や救命講習の内容をブログやさくらや便りには掲載しているが、コロナ禍のため家族会が開催できておらず、直接家族に伝える機会がないままなのでどこまで伝わっているのかわからない。 ○ICT導入し、記録の電子化に取り組んでいる。まだ得意、不得意の職員にわかれるが、それでも一応全職員が操作できるようになった。</p>	<p>【今回、外部評価で確認した事業所の特徴】 事業所は島内にある唯一のグループホームで、海や山などの豊かな自然に恵まれた場所に立地している。職員は管理者に話やすく、幅広い世代の職員同士も良好な関係が築かれているほか、勤務シフトの変更に対応するなどの働きやすい職場環境づくりにも努めており、職員の離職率も低い。また、事業所には不穏な利用者もおり、事業所前に池があることから、日中には玄関の施錠をしているものの、自分の判断で、玄関の鍵を開けて外出する利用者もいる。さらに、テラス等へ出ることできる扉を開けて、戸外へ自由に入出入りする利用者もいる。さらに、事業所として、昨年より介護ソフトを導入してICT化などの業務改善を図り、職員はタブレットを活用して記録することができ、使い慣れたことから、職員の負担軽減に繋がっている。事業所より少し高台にある町のひまわり百年館を活用して、週3回、「さくらカフェ」を運営し、利用者と一緒に歩いて出かけ、コーヒーやお茶などを飲むことが利用者の楽しみの一つとなっている。加えて、地域において、地域に集える場として、「さくら浜力フェ」や「さくら茶話会」を開催するなど、地域の福祉ニーズ等にも対応し、地域からも認識される事業所となっている。</p>
------------------------------------	---	---

評価結果表

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
I.その人らしい暮らしを支える									
(1)ケアマネジメント									
1	思いや暮らし方の希望、意向の把握	a	利用者一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。	○	ケアプラン作成の際など、利用者だけでなく、他の職員からも意見を集めて本人の希望や意向を汲み取るように取り組んでいる。	◎		◎	入居前に、管理者が自宅に出向き、利用者や家族から、思いや意向などを聞いている。また、共用のデイサービスやショートステイの利用から、入居に繋がる利用者も多く、事前に情報を把握することができている場合もある。さらに、日々の生活の中で、利用者から思いなどを聞くこともあり、新たに聞いた情報は、アセスメントシートや個人記録等に記載し、職員間で情報を共有している。
		b	把握が困難な場合や不確かな場合は、「本人はどうか」という視点で検討している。	○	ケアプラン作成の際など、利用者だけでなく、他の職員からも意見を集めて本人の希望や意向を汲み取るように取り組んでいる。				
		c	職員だけでなく、本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)とともに、「本人の思い」について話し合っている。	○	ケアプラン作成の際は家族に連絡をとり、本人の様子や気持ちを伝えるようにしている。また家族の思いも聞き取るようにしている。				
		d	本人の暮らし方への思いを整理し、共有化するための記録をしている。	○	介護職員に「日々の記録」として変わったことがあれば個人記録に記入してもらっている。				
		e	職員の思い込みや決めつけにより、本人の思いを見落とさないように留意している。	○	毎朝ミーティングを行い、利用者さんの様子やケアの方針についてなどをその日勤務の職員で確認している。				
2	これまでの暮らしや現状の把握	a	利用者一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、こだわりや大切にしてきたこと、生活環境、これまでのサービス利用の経過等、本人や本人をよく知る人(家族・親戚・友人等)から聞いている。	○	ケアプラン作成の際は家族に連絡をとり、本人の様子や気持ちを伝えるようにしている。また家族の思いも聞き取るようにしている。			◎	入居前に、管理者が自宅に出向き、アセスメントシートを活用して、生活歴やこれまでの暮らし方、現状などの聞き取りをしている。また、以前利用していた介護サービス事業所や介護支援専門員から情報を聞くとともに、管理者等が退院時のカンファレンスに参加し、情報収集をすることもある。さらに、事業所では、厚生労働省の「ケアの質の向上に向けた科学的介護情報システム(LIFE)」の様式に対応するようになり、必要な情報を聞き取り、システム上に記録を残している。
		b	利用者一人ひとりの心身の状態や有する力(わかること・できること・できそうなこと等)等の現状の把握に努めている。	◎	申し送り記録や個人記録を利用して現状の把握と共有に努めている。また、月1で個々のモニタリングを作成し主治医、主治歯科医に情報提供している。				
		c	本人がどのような場所や場面で安心したり、不安になったり、不安定になったりするかを把握している。	◎	変わったこと、対応に苦慮することなどは申し送りノートや個人記録などを活用して職員間で共有しており、さらに、月に1度のミーティングでも対応を検討している。				
		d	不安や不安定になっている要因が何かについて、把握に努めている。(身体面・精神面・生活環境・職員のかかわり等)	◎	変わったこと、対応に苦慮することなどは申し送りノートや個人記録などを活用して職員間で共有しており、さらに、月に1度のミーティングでも対応を検討している。				
		e	利用者一人ひとりの一日の過ごし方や24時間の生活の流れ・リズム等、日々の変化や違いについて把握している。	◎	起床時間、就寝時間などはある程度決めているが、かならず、その時間どおりにしておらず、それぞれの生活リズムに合わせて支援している。				
3	チームで行うアセスメント(※チームとは、職員のみならず本人・家族・本人をよく知る関係者等を含む)	a	把握した情報をもとに、本人が何を求め必要としているのかを本人の視点で検討している。	◎	月1回のミーティングで各利用者への対応を見直している。またケアプラン作成時には家族にも連絡をとりケアの方向性について話し合っている。			○	事業所では、利用者が自宅のように、好きな時に好きなことができるような支援に努めており、利用者の意向を確認して、納得の上で様々な活動を行ってもらっている。月1回全体ミーティングを実施し、困難事例や原因などを職員間で話し合い、サービスの向上に繋げている。また、アセスメント情報をもとに、利用者や家族等の意見を取り入れて、利用者の視点で検討をしている。
		b	本人がより良く暮らすために必要な支援とは何かを検討している。	◎	月1回のミーティングで各利用者への対応を見直している。またケアプラン作成時には家族にも連絡をとりケアの方向性について話し合っている。				
		c	検討した内容に基づき、本人がより良く暮らすための課題を明らかにしている。	◎	月1回のミーティングで各利用者への対応を見直している。またケアプラン作成時には家族にも連絡をとりケアの方向性について話し合っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
4	チームでつくる本人がより良く暮らすための介護計画	a	本人の思いや意向、暮らし方が反映された内容になっている。	○	本人に直接意向を確認したり、本人が普段口に出している言葉、日々の様子を反映して計画を作成している。	/	/	/	事前に、利用者から意見を聞くほか、家族から電話等で意見や意向の聞き取りをしている。また、月1回利用者一人ひとりのモニタリング状況をまとめた資料を活用して、看護師から医師や歯科医師に情報を伝え、指示やアドバイスをもらうことができている。さらに、月1回の全体ミーティングにおいて、アセスメント情報をもとに、意見や指示を踏まえて、職員間で意見やアイデアを出し合いながら話し合い、計画担当者を中心に介護計画を作成し、管理者が確認をしている。重度の利用者には、事業所で穏やかに生活が送れるように、環境整備を取り入れた計画を作成をしている。加えて、家族の協力を計画の中に盛り込むこともあり、「家族に会いに来てもらい、楽しい時間を過ごす」などの目標を取り入れた計画を作成することもある。
		b	本人がより良く暮らすための課題や日々のケアのあり方について、本人、家族等、その他関係者等と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映して作成している。	○	月1回のミーティングで各利用者への対応を見直している。またケアプラン作成時には家族にも連絡をとりケアの方向性について話し合っている。	◎	◎		
		c	重度の利用者に対しても、その人が慣れ親しんだ暮らし方や日々の過ごし方ができる内容となっている。	○	月1回のミーティングで各利用者への対応を見直している。またケアプラン作成時には家族にも連絡をとりケアの方向性について話し合っている。	/	/	/	
		d	本人の支え手として家族等や地域の人たちとの協力体制等が盛り込まれた内容になっている。	△	一部の家族の協力を盛り込んだ計画もできているが、ほとんどの計画は地域や家族の協力までは盛り込めていない。	/	/	/	
5	介護計画に基づいた日々の支援	a	利用者一人ひとりの介護計画の内容を把握・理解し、職員間で共有している。	○	日誌にそれぞれの目標を記載し、毎日できたかどうかを評価している。	/	/	/	事業所では介護ソフトを導入するとともに、厚生労働省のLIFEの様式を活用するようになっている。中には、タブレットでの入力に慣れない職員がいたものの、概ね使いこなし、記録できるようになってきている。また、日誌には、はっきりとした短期目標を記載するとともに、個人記録の上段部分には、目標等を記載し、職員は計画の内容が確認しやすいようになっている。さらに、日々のサービスの実施内容は、○△×を付けて、実施の有無などを評価するとともに、毎月末には、総合的な評価を残している。加えて、個人記録には、普段と変わった様子を記載するよう努めており、発した言葉などの詳細まで記載するとともに、落ち着いて生活が送れている利用者には、記載内容が少なくなることもある。職員の気づきは、申し送り記録等に記載し、全体ミーティングで話し合うことができている。
		b	介護計画にそってケアが実践できたか、その結果どうだったかを記録して職員間で状況確認を行うとともに、日々の支援につなげている。	○	日誌にそれぞれの目標を記載し、毎日できたかどうかを評価している。また、毎朝、短時間のミーティングを行い、ケアの方針などを確認している。	/	/	/	
		c	利用者一人ひとりの日々の暮らしの様子(言葉・表情・しぐさ・行動・身体状況・エピソード等)や支援した具体的内容を個別に記録している。	○	個別記録に気になることなどがあれば記入してもらうようになっている。状態が落ち着いている利用者については記録が少ないこともある。	/	/	/	
		d	利用者一人ひとりについて、職員の気づきや工夫、アイデア等を個別に記録している。	○	月1回のミーティングで各利用者への対応を見直している。その際に気づいたことやケアの変更があればミーティング記録に記録し、回覧して全職員で共有している。	/	/	/	
6	現状に即した介護計画の見直し	a	介護計画の期間に応じて見直しを行っている。	◎	半年を基準にしてケアプランの見直しを行っている。	/	/	/	6か月間に1回を基本として、介護計画の見直しをしている。日々のサービス内容を○×等を付けて評価を行うとともに、月1回全体ミーティングの中で話し合い、利用者の現状を確認し、評価を残している。また、利用者一人ひとりを取りまとめたモニタリング情報を、医師や歯科医師へ情報提供を行い、アドバイス等をもらうことができている。さらに、入退院時や状態の変化があった場合には、現状に即した介護計画の見直しをしている。
		b	新たな要望や変化がみられない場合も、月1回程度は現状確認を行っている。	◎	月1で個々のモニタリングを作成し主治医、主治歯科医に情報提供している。	/	/	/	
		c	本人の心身状態や暮らしの状態に変化が生じた場合は、随時本人、家族等、その他関係者等と見直しを行い、現状に即した新たな計画を作成している。	◎	ユニットが変更になった場合、区分変更をした場合、入退院時にはケアプランを立て直すようになっている。	/	/	/	
7	チームケアのための会議	a	チームとしてケアを行う上での課題を解決するため、定期的、あるいは緊急案件がある場合にはその都度会議を開催している。	◎	月1回は全職員を対象にしたミーティングを行っている。緊急案件がある場合は常勤ミーティングを行う。ミーティングができない場合でも管理者が常勤職員に意見確認を行う。	/	/	/	日々の朝の申し送りで話し合うほか、夕方の申し送り時には、日誌等のノートを確認してもらい、申し送りをしている。また、毎月第2金曜日の13時30分から1時間程度、全体ミーティングを実施するとともに、終了後には研修会を実施している。ミーティングでは、職員間で共有を図り、統一したサービスの実施に繋げている。さらに、緊急案件のある場合には、常勤職員でミーティングを実施し、対応をしている。加えて、参加できない職員には、ミーティング記録を1週間、職員の仕事場に配置して、職員に確認してもらうとともに、重要事項等は、朝の申し送り等でも伝えている。
		b	会議は、お互いの情報や気づき、考え方や気持ちを率直に話し合い、活発な意見交換ができるよう雰囲気や場づくりを工夫している。	◎	堅苦しくなく、それぞれが気づきや考え、経験を口に出せるような雰囲気でのミーティングを行っている。	/	/	/	
		c	会議は、全ての職員を参加対象とし、可能な限り多くの職員が参加できるよう開催日時や場所等、工夫している。	○	勤務の都合があるので全員の参加は難しい。なるべく多くの職員が参加できる日程で開催するように配慮はしている。	/	/	/	
		d	参加できない職員がいた場合には、話し合われた内容を正確に伝えるしくみをつくっている。	○	ミーティング記録を1週間は職員が目を通せる場所に設置し、確認したらサインをしてもらうようになっている。また大事なことは朝のミーティングでも伝えている。	/	/	/	
8	確実な申し送り、情報伝達	a	職員間で情報伝達すべき内容と方法について具体的に検討し、共有できるしくみをつくっている。	◎	毎朝ミーティングを行う、申し送り記録を記入する、記録にきちんと目を通す等のことを開設から皆で試行錯誤し、漸く「知らなかった」ということがなくなってきたところ。	/	/	/	日々の朝・夕の申し送りを実施するほか、職員に日誌や申し送り記録等を確認してもらい、確実な情報伝達に繋げている。以前は、記録を確認せずに、職員から「知らなかった」などの声が聞かれていたが、職員間できちんと確認する雰囲気づくりができてきている。
		b	日々の申し送りや情報伝達を行い、重要な情報は全ての職員に伝わるようにしている。(利用者の様子・支援に関する情報・家族とのやり取り・業務連絡等)	○	朝のミーティングや職員のグループラインなどを活用して情報伝達をしている。	○	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(2) 日々の支援									
9	利用者一人ひとりの思い、意向を大切にしたい支援	a	利用者一人ひとりの「その日したいこと」を把握し、それを叶える努力を行っている。	◎	買い物やカフェ、ドライブなど利用者から希望があれば応えるようにしているし、希望が伝えにくい場合も職員の手が空いたら表情が良くなることのできるような支援をしている。	/	/	/	重度化に伴い、利用者ができることが少なくなってきているものの、職員が声をかけて、可能な範囲で自己決定してもらえよう努めている。また、意思疎通が難しい利用者には、職員が表情や様子を観察しながら、笑顔などの表情を見逃さないように努めるとともに、穏やかな生活が送れるよう支援している。さらに、入浴時など、職員は利用者へ声かけをするとともに、納得してもらえない場合には、説明などを行い、納得の上で行ってもらえるよう取り組んでいる。加えて、ドライブやレクリエーションなどをみんなで一緒にいき、笑顔や生き生きとした表情が見られるよう努めている。
		b	利用者が日々の暮らしの様々な場面で自己決定する機会や場をつくっている。(選んでもらう機会や場をつくる、選ぶのを待っている等)	○	それぞれの希望や選択が尊重されるように支援している。	/	/	○	
		c	利用者が思いや希望を表せるように働きかけたり、わかるかに合わせた支援を行うなど、本人が自分で決めたり、納得しながら暮らせるよう支援している。	◎	何事も利用者が納得したうえで実施するようにしている。(納得してできるように説明したり、声掛けの工夫をしたりしている。)	/	/	/	
		d	職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースや習慣を大切にしたい支援を行っている。(起床・就寝、食事・排泄・入浴等の時間やタイミング・長さ等)	○	できる範囲でそれぞれのペースに合わせた支援を行うようにしている。	/	/	/	
		e	利用者の活き活きした言動や表情(喜び・楽しみ・うるおい等)を引き出す言葉がけや雰囲気づくりをしている。	○	全ての時間では難しいが、余裕のある時間帯には楽しめるように配慮して関わっている。	/	/	○	
		f	意思疎通が困難で、本人の思いや意向がつかめない場合でも、表情や全身での反応を注意深くキャッチしながら、本人の意向にそった暮らし方ができるよう支援している。	○	症状が進行していても、ある程度、安定して生活ができるように支援している。	/	/	/	
10	一人ひとりの誇りやプライバシーを尊重した関わり	a	職員は、「人権」や「尊厳」とは何かを学び、利用者の誇りやプライバシーを大切にしたい言葉かけや態度等について、常に意識して行動している。	○	年に数回、人権や尊厳に関する研修を行い、またセルフチェックなども行っている。OJTにおいても気が付けば管理者が注意を促すようにしている。	◎	○	○	月1回実施する全体ミーティングの後に、1時間程度研修会を実施し、人権や尊厳等をテーマに取り上げて、職員は学ぶことができています。また、定期的にセルフチェックを行うとともに、管理者が気になる場合には、該当職員に注意を促している。さらに、入浴時などには、同性介助に努めるとともに、プライバシーの配慮に努めている。加えて、居室の入室時には、利用者の声をかけてから入室するとともに、不在時にも、事前に「掃除で入ります」などの声をかけてから、確認の上で入室することができている。
		b	職員は、利用者一人ひとりに対して敬意を払い、人前であからさまな介護や誘導の声かけをしないよう配慮しており、目立たずさりげない言葉がけや対応を行っている。	◎	利用者の尊厳に配慮してケアを行っている。	/	/	◎	
		c	職員は、排泄時や入浴時には、不安や羞恥心、プライバシー等に配慮しながら介助を行っている。	◎	男性職員の介助での入浴に抵抗がある女性利用者については女性職員の介助で入浴できるように配慮するなどしている。	/	/	/	
		d	職員は、居室は利用者専用の場所であり、プライバシーの場所であることを理解し、居室への出入りなど十分配慮しながら行っている。	◎	入室の際には利用者へ一言声をかけてから入室するようにしている。	/	/	○	
		e	職員は、利用者のプライバシーの保護や個人情報漏えい防止等について理解し、遵守している。	◎	年に1度は情報の取り扱いについての研修をおこなっており、セルフチェックでも大切さを自覚している職員が多いという結果が出ていた。	/	/	/	
11	ともに過ごし、支え合う関係	a	職員は、利用者を介護される一方の立場におかず、利用者に助けを求めたり教えてもらったり、互いに感謝し合うなどの関係性を築いている。	◎	利用者のできる家事や仕事をみつけてもらい感謝を伝えるようにしている。	/	/	/	洗濯物干しやたたみ、皿洗い、モップがけ、新聞たたみなど、利用者ができることを手伝ってもらい、職員は感謝の言葉を伝えている。また、他の利用者の車いすを押したり、他の利用者の洗濯物をついでに、居室へ運んだり、下膳を行うなど、利用者同士で助け合いや支え合う場面も見られ、職員は安全に配慮した見守りをしている。さらに、利用者同士がトラブルを起こすこともあり、配席を配慮したり、早期に職員が利用者同士の間に入ったりするなど、未然にトラブルの防止に努めている。
		b	職員は、利用者同士がともに助け合い、支え合って暮らしていくことの大切さを理解している。	◎	利用者が利用者を支えようとしている際はむやみに手出しすることなく、安全に配慮して見守るようにしている。	/	/	/	
		c	職員は、利用者同士の関係を把握し、トラブルになったり孤立したりしないよう、利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。(仲の良い利用者同士が過ごせる配慮をする、孤立しがちな利用者が交わる機会を作る、世話役の利用者にうまく力を発揮してもらおう場面をつくる等)。	◎	喧嘩にならないように、一方的にきつい言葉をかけられないように生活動線などを配慮している。仲の良い利用者同士で寛いで過ごせるように心がけている。	/	/	○	
		d	利用者同士のトラブルに対して、必要な場合にはその解消に努め、当事者や他の利用者へ不安や支障を生じさせないようにしている。	◎	利用者同士でのトラブルになりそうなどは事前に予防するように配慮している。	/	/	/	

愛媛県グループホームさくらや

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
12	馴染みの人や場との関係継続の支援	a	これまで支えてくれたり、支えてきた人など、本人を取り巻く人間関係について把握している。	○	入所前に聞き取りをしている。また入所前からデイサービスを利用している場合には在宅での人間関係もサービス担当者会議なので把握できる。	/	/	/	
		b	利用者一人ひとりがこれまで培ってきた地域との関係や馴染みの場所などについて把握している。	○	入所前に聞き取りをしている。また入所前からデイサービスを利用している場合には在宅での人間関係もサービス担当者会議なので把握できる。	/	/	/	
		c	知人や友人等に会いに行ったり、馴染みの場所に出かけていくなど本人がこれまで大切にしてきた人や場所との関係が途切れないよう支援している。	○	なるべく生活していた地域にもドライブなどで足を運べるように工夫している。しかし、コロナ禍で関わりは難しい。	/	/	/	
		d	家族、知人、友人等、本人の馴染みの人たちが、いつでも気軽に訪れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	色々な人が面会に気軽に来れるように配慮しているが、コロナ禍で妨げられたことも多い。	/	/	/	
13	日常的な外出支援	a	利用者が、1日中ホームの中で過ごすことがないよう、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう取り組んでいる。(職員側の都合を優先したり、外出する利用者、時間帯、行き先などが固定化していない)(※重度の場合は、戸外に出て過ごすことも含む)	◎	週に3回近隣の社協さんに共有スペースをかりてカフェを開催している。カフェでの時間が利用者の楽しみになっている。ドライブも頻繁に出かけているし、希望者は買い物にも行っている。	○	◎	◎	コロナ禍において、外出できる機会は減少しているものの、感染状況を見計らいながら、ドライブに出かけたり、事業所周辺を散歩したりするなど、日常的に外出できるよう支援している。中には、自分で鍵を開けて自由に外に出て、近隣にある鳥小屋に行き、水や餌をやるなどの世話をしたり、近隣の草引きをしたりする利用者もいる。また、天気の良い日には、テラスに出て、日光浴や外気浴を行い、気分転換をしている。さらに、事業所より少し高台にある町のひまわり百年館を活用して、週3回、「さくらカフェ」を運営し、利用者と一緒に歩いて出かけ、コーヒーやお茶などを飲むことが利用者の楽しみの一つとなっている。
		b	地域の人やボランティア、認知症サポーター等の協力も得ながら、外出支援をすすめている。	◎	カフェはボランティアスタッフが運営してくれている。	/	/	/	
		c	重度の利用者も戸外で気持ち良く過ごせるよう取り組んでいる。	◎	状態に関わらず、本人が希望すればさくらカフェやドライブに出かけている。テラスで日向ぼっこをして過ごすこともある。	/	/	◎	
		d	本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら、普段は行けないような場所でも出かけられるように支援している。	△	コロナ禍において地域の人や家族との外出はかなり制限されている。	/	/	/	
14	心身機能の維持、向上を図る取り組み	a	職員は認知症や行動・心理症状について正しく理解しており、一人ひとりの利用者の状態の変化や症状を引き起こす要因をひもとき、取り除くケアを行っている。	◎	年に数回は認知症についての研修会を実施している。また、困ったことが起きると職員間で話し合い、何が原因なのか、どう対応するのが良いかを話し合っている。	/	/	/	月1回実施する研修会で、職員は認知症のことを学び、理解している。全体ミーティング等を活用して、困難事例や困ったことを職員間で話し合い、対応方法などを検討して統一したサービスの実施に努めている。また、日々の生活の中に、散歩やテレビ体操、口腔ケア体操などを取り入れ、利用者の心身機能の維持に努めている。さらに、洗濯物干しや草引き、ニワトリの世話など、できることを利用者は手伝っている。加えて、重度化しても、利用者にタオルたたみなどのできることを手伝ってもらうなど、可能な範囲で、できることをしてもらえよう環境づくりに努めている。
		b	認知症の人の身体面の機能低下の特徴(筋力低下・平衡感覚の悪化・排泄機能の低下・体温調整機能の低下・嚥下機能の低下等)を理解し、日常生活を営む中で自然に維持・向上が図れるよう取り組んでいる。	○	理解しているし、なるべく生活動作で機能維持ができるように支援している。	/	/	/	
		c	利用者の「できること、できそうなこと」については、手や口を極力出さずに見守ったり一緒に行うようにしている。(場面づくり、環境づくり等)	◎	できることが少なくなってきた利用者に対してでもできることを探して取り組めるように支援している。	◎	/	◎	
15	役割、楽しみごと、気晴らしの支援	a	利用者一人ひとりの生活歴、習慣、希望、有する力等を踏まえて、何が本人の楽しみごとや役割、出番になるのかを把握している。	◎	それぞれのできること、得意なことは把握して取り組める機会を持てるように支援している。	/	/	/	洗濯物干しやたたみ、血洗い、モップがけ、新聞たたみ、鳥の世話、草引きなど、日々の生活の中で、職員は利用者一人ひとりの役割や出番づくりに努めている。また、認知症状の進行で、利用者の理解が難しく、反応が遅くても、職員は分かりやすく説明するとともに、遅くても待つ介護に努めている。コロナ禍においても、裁縫を活用したマスクづくりやふきんづくりを行い、安価で販売するなど、利用者の励みにも繋がっている。さらに、ひよこやニワトリを育てたり、近隣の草引きをしたりするなど、少しでも楽しみや張り合いが持てるような支援に努めている。
		b	認知症や障害のレベルが進んでも、張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、日常的に、一人ひとりの楽しみごとや役割、出番をつくる取り組みを行っている。	○	障害のレベルが進んでできることが少なくなってきたりもなるべく穏やかに過ごせるように支援している。	◎	○	◎	
		c	地域の中で役割や出番、楽しみ、張り合いが持てるよう支援している。	◎	マスクを作ったり、鶏の説明を小学生にしたり、近隣の草むしりをしたりできるように支援している。	/	/	/	

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと	
16	身だしなみやおしゃれの支援	a	身だしなみを本人の個性、自己表現の一つととらえ、その人らしい身だしなみやおしゃれについて把握している。	○	自分で服を選べる利用者には自分の好きな服を選んできている。				毎朝、自分で服を選んだり、髭剃りをしたりする利用者もいる。重度化等に伴い、食事の際に食べこぼしが多くなった利用者が、自らエプロンの着用を希望し、着用できるよう支援している。また、汚れが見られた利用者には、居室で服を着替えてもらうなどのフォローをしている。さらに、美容学校に通う学生の帰省時に、散髪をしてもらい、整容を整えることもある。加えて、重度な利用者にも、以前の好みの服を着られるよう支援するほか、着やすさや肌触りの良い物などを着用してもらい、本人らしさが保てるよう支援している。	
		b	利用者一人ひとりの個性、希望、生活歴等に応じて、髪形や服装、持ち物など本人の好みに整えられるように支援している。	◎	希望する方には美容室を予約して美容室にて散髪してもらっている。					
		c	自己決定がしにくい利用者には、職員と一緒に考えたりアドバイスする等本人の気持ちにそって支援している。	○	職員が適切で過ごしやすい服を選んでいる。					
		d	外出や年中行事等、生活の彩りにあわせてその人らしい服装を楽しめるよう支援している。	◎	出掛ける際は、少しおしゃれな服などを選んで着られるように支援している。					
		e	整容の乱れ、汚れ等に対し、プライドを大切にさりげなくカバーしている。(髭、着衣、履き物、食べこぼし、口の周囲等)	○	できるかぎりそのようにしている。	◎	○	○		
		f	理容・美容は本人の望む店に行けるように努めている。	◎	希望する方には美容室を予約して美容室にて散髪してもらっている。					
		g	重度な状態であっても、髪形や服装等本人らしさが保てる工夫や支援を行っている。	○	施設内においても美容師の卵の学生にボランティアで髪を切りに来てもらうことがある。					○
17	食事を楽しむことのできる支援	a	職員は、食事の一連のプロセスの意味や大切さを理解している。	○	理解しており、食事の時間が楽しみであるように支援している。				管理栄養士資格を持つ施設長を兼ねる代表者が、1か月単位で、昼食と夕食の献立を作成するとともに、1週間単位で朝食の献立を作成をしている。1週間分の食材を施設長がまとめて買い物に行くとともに、不足の食材などを職員が買い足し、利用者に調理の下ごしらえや下膳などを手伝ってもらいながら、昼食と夕食は調理がメインの職員が調理をしている。朝食は、夜勤の職員が交代で調理するとともに、朝5時過ぎには準備を行い、利用者の起床時間などのリズムに合わせて、食事を摂ることができ、また、近隣住民から差し入れていただいた果物や野菜が食卓に上ることもある。アレルギーや薬の副作用のある利用者には、代替えの食材を用意している。利用者の状態に応じて、刻みや一口サイズなどの食事形態にも対応している。以前は、食事の際に、同じ食卓を囲み、同じ物を食べていたが、コロナ禍において、職員は別のテーブルで、同じ物を食べるようになってきている。さらに、とんど焼きの際には、さつまいもを焼いて食べたり、お好み焼きと一緒に焼いて食べたりするなど、利用者が食事を楽しむことができるよう工夫している。加えて、重度な利用者もフロアに出て、調理の匂いや音を感じる事ができている。管理栄養士から、調理の指示をもらうこともできている。	
		b	買い物や献立づくり、食材選び、調理、後片付け等、利用者とともにやっている。	○	足りない食材の買い足しなどにお使いをお願いすることもあり、後片付けも利用者にも協力してもらっている。					○
		c	利用者とともに買い物、調理、盛り付け、後片付けをする等を行うことで、利用者の力の発揮、自信、達成感につなげている。	○	足りない食材の買い足しなどにお使いをお願いすることもあり、後片付けも利用者にも協力してもらっている。ただ、重度化してきており、年々できることが減ってきている。					
		d	利用者一人ひとりの好きなものや苦手なもの、アレルギーの有無などについて把握している。	○	苦手なものが具体的にある場合は職員間で情報共有している。					
		e	献立づくりの際には、利用者の好みや苦手なもの、アレルギー等を踏まえつつ、季節感を感じさせる旬の食材や、利用者にとって昔ながらの味を取り入れている。	○	行事食はお正月ぐらいしかないが、地域の人の差し入れなどで旬の野菜や果物が食卓に上ることは多い。					○
		f	利用者一人ひとりの咀嚼・嚥下等の身体機能や便秘・下痢等の健康状態にあわせて調理方法としつつ、おいしそうな盛り付けの工夫をしている。(安易にミキサー食や刻み食で対応しない、いろどりや器の工夫等)	○	嚥下能力に合わせて安全に食べられる食形態にできるだけ調整して、本人が食べたいと思える状態で提供している。					
		g	茶碗や湯飲み、箸等使い慣れたもの、使いやすいものを使用している。	△	食器やお箸は共有のものを使っている。麻痺等で力が弱い利用者にはプラスチック製の軽い食器を用意している。					○
		h	職員も利用者と同じ食卓を囲んで食事を一緒に食べながら一人ひとりの様子を見守り、食事のペースや食べ方の混乱、食べこぼしなどに対するサポートをさりげなくやっている。	△	コロナ禍で席を共にして食事をするのは避けている。					○
		i	重度な状態であっても、調理の音やにおい、会話などを通して利用者が食事が待ち遠しくおいしく味わえるよう、雰囲気づくりや調理に配慮している。	○	お好み焼きの献立の場合は各ユニットで焼くのでユニットの中がお好み焼きの良い匂いでいっぱいになる。他にも献立の説明をしたりすることもある。	◎				○
		j	利用者一人ひとりの状態や習慣に応じて食べられる量や栄養バランス、カロリー、水分摂取量が1日を通じて確保できるようにしている。	○	毎日の排便、排尿の状態を確認し、月1度の体重測定で栄養バランスやエネルギー量、水分量が十分かどうかを検討している。					
		k	食事が少なかったり、水分摂取量の少ない利用者には、食事の形態や飲み物の工夫、回数やタイミング等工夫し、低栄養や脱水にならないよう取り組んでいる。	◎	おやつやカフェのタイミングなどを利用してエネルギー量や水分量を調節している。					
		l	職員で献立のバランス、調理方法などについて定期的に話し合い、偏りがないように配慮している。場合によっては、栄養士のアドバイスを受けている。	◎	管理栄養士が献立を立てており、調理の職員が調理方法などで意見があれば栄養士に伝えるようにしている。					◎
		m	食中毒などの予防のために調理用具や食材等の衛生管理を日常的に行い、安全で新鮮な食材の使用と管理に努めている。	○	年に1度は感染予防についての研修もしているし、食中毒の予防には配慮している。					

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
18	口腔内の清潔保持	a	職員は、口腔ケアが誤嚥性肺炎の防止につながることを知っており、口腔ケアの必要性、重要性を理解している。	◎	年に1度口腔ケアについての研修を行っている。				歯科衛生士の資格を持つ職員が勤務するようになり、必ず月1回以上、利用者一人ひとりの口腔内の状況の確認と評価を行い、記録に残すことができています。また、職員が口腔ケア体操のDVDを作成し、食事前には口腔ケア体操を実施するようになっている。さらに、毎食後、職員が利用者に声をかけ、順番に洗面台へ誘導をして、口腔ケアを実施している。加えて、異常が見られる場合には、歯科衛生士の資格を持つ職員の判断で、歯科医の往診に繋げるとともに、月1回歯科医に利用者一人ひとりのモニタリング状況の情報提供を行い、アドバイスを受けている。
		b	利用者一人ひとりの口の中の健康状況(虫歯の有無、義歯の状態、舌の状態等)について把握している。	◎	歯科衛生士の資格を持つ職員に月に一度口腔内の評価をしてもらっている。			◎	
		c	歯科医や歯科衛生士等から、口腔ケアの正しい方法について学び、日常の支援に活かしている。	◎	年に1度口腔ケアについての研修を行っている。				
		d	義歯の手入れを適切に行えるよう支援している。	◎	口腔ケアの声掛けは毎食後に必ず行っており、それぞれの利用者の能力に応じた支援を行っている。				
		e	利用者の力を引き出しながら、口の中の汚れや臭いが生じないように、口腔の清潔を日常的に支援している。(歯磨き・入れ歯の手入れ・うがい等の支援、出血や炎症のチェック等)	○	毎食後にならず口腔ケアの声掛けを行い、必要な人には介入しているが、自分の歯が残っている方の歯磨きの介入が難しく、磨き残しなどがある。			◎	
		f	虫歯、歯ぐきの腫れ、義歯の不具合等の状態をそのままにせず、歯科医を受診するなどの対応を行っている。	◎	入れ歯の不具合や口腔内の状況に応じて歯科衛生士の判断で歯科医受診の援助を行っている。				
19	排泄の自立支援	a	職員は、排泄の自立が生きる意欲や自信の回復、身体機能を高めることにつながることや、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)の使用が利用者の心身に与えるダメージについて理解している。	○	なるべく自立排泄できるように支援している。				事業所では、利用者が自立した排泄ができるよう努めているものの、重度化などに伴い、半数以上の利用者は、排泄介助が必要となってきている。布パンツで生活できている利用者があるものの、ほとんどの利用者はリハビリパンツか、テープタイプのおむつを使用している。また、職員は個別記録等で排泄パターンを把握し、声かけやトイレ誘導をしている。さらに、おむつやパッドなどの排泄用品の使用時には、管理者と計画作成担当者、看護師で話し合い、適切な排泄用品を選択し、家族に確認の上で使用している。加えて、さくらカフェまで散歩するなどの便秘対策に取り組むことができていたものの、コロナ禍の再拡大において開催を自粛し、目的を持った散歩ができていないため、便秘の利用者が増えてきている。
		b	職員は、便秘の原因や及ぼす影響について理解している。	○	理解している。				
		c	本人の排泄の習慣やパターンを把握している。(間隔、量、排尿・排便の兆候等)	○	概ね把握している。				
		d	本人がトイレで用を足すことを基本として、おむつ(紙パンツ・パッドを含む)使用の必要性や適切性について常に見直し、一人ひとりのその時々状態にあった支援を行っている。	◎	布パンツからリハビリパンツに変更する場合は職員間でそれが適切かを協議するようしており、パッドの種類も排泄の状況や個人の能力に合わせて複数の職員で検討して決めている。	◎		◎	
		e	排泄を困難にしている要因や誘因を探り、少しでも改善できる点はないか検討しながら改善に向けた取り組みを行っている。	○	なるべくトイレできちんと排泄できるように心を砕いている。				
		f	排泄の失敗を防ぐため、個々のパターンや兆候に合わせて早めの声かけや誘導を行っている。	○	利用者の様子を観察して声掛けを行うようにしている。				
		g	おむつ(紙パンツ・パッドを含む)を使用する場合は、職員が一方的に選択するのではなく、どういつ時間帯にどのようなものを使用するか等について本人や家族と話し合い、本人の好みや自分で使えるものを選択できるよう支援している。	◎	布パンツからリハビリパンツに変更する場合は職員間でそれが適切かを協議するようしており、パッドの種類も排泄の状況や個人の能力に合わせて複数の職員で検討して決めている。大きく変更する場合は家族にも相談し、本人とも話をする。				
		h	利用者一人ひとりの状態に合わせて下着やおむつ(紙パンツ・パッドを含む)を適時使い分けしている。	◎	状態に合わせて布パンツ、リハビリパンツ、テープタイプのオムツを使い分けており、パッドの種類も数種類を使い分けしている。				
		i	飲食物の工夫や運動への働きかけなど、個々の状態に応じて便秘予防や自然排便を促す取り組みを行っている。(薬に頼らない取り組み)	○	便秘にならないように体操したり歩いたり動いたりするようにしている。				
20	入浴を楽しむことができる支援	a	曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、利用者一人ひとりの希望や習慣にそって入浴できるように支援している。(時間帯、長さ、回数、温度等)	○	曜日、時間帯は決まっているけれど、その中でなるべく利用者一人ひとりの希望に沿った入浴ができるように支援している。原則週3回は入浴するようにしている。			◎	利用者は、週3回入浴をすることができる。午前9時から午後2時30分までの利用者の入りたい時間帯を確認しながら、湯船に浸かる時間や湯温などの希望を聞き、柔軟に対応をしている。利用者の希望に応じて、可能な範囲で同性での入浴介助の対応をしている。また、事業所では、利用者に納得してもらったうえで入浴支援に努めており、入浴拒否のある利用者にも、声かけや説明を行い、翌日に入浴日を変更したり、別の職員や時間を変えて声かけをしたり、うまくいったパターンを職員間で共有するなどの工夫をしながら、週2回入浴してもらうことができています。さらに、湯船に浸かることのできない重度の利用者には、清拭のほか、週1回のシャワー浴や足浴の対応をすることもある。
		b	一人ひとりが、くつろいだ気分が入浴できるよう支援している。	○	本人が望めば身体機能が低下していてもなるべく安全に浴槽浴ができるように支援している。				
		c	本人の力を活かしながら、安心して入浴できるよう支援している。	◎	本人が望めば身体機能が低下していてもなるべく安全に浴槽浴ができるように支援している。				
		d	入浴を拒む人に対しては、その原因や理由を理解しており、無理強いせず気持ち良く入浴できるよう工夫している。	◎	拒否があったとしても入浴の無理強いはせず、本人が納得した状態で週2回は入れるように努力している。				
		e	入浴前には、その日の健康状態を確認し、入浴の可否を見極めるとともに、入浴後の状態も確認している。	◎	血圧や発熱の有無、そのほか、その日の様子や顔色などにも注意して観察し入浴の可否を判断している。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
21	安眠や休息の支援	a	利用者一人ひとりの睡眠パターンを把握している。	◎	夜間の様子を記録を記録しており、寝られない利用者の原因は職員で話し合い原因を検討するようにしている。	/	/	/	認知症の進行等に伴い、昼夜が逆転した利用者が1階に数名いるものの、他の利用者に影響を及ぼさない範囲で、自由に生活を送ってもらっている。時には、夜間に眠れない利用者もあり、職員と一緒にお茶を飲んだり、おしゃべりをしたりするなどの対応をしている。中には、体調面を考え、医師に相談して眠剤を服薬している利用者もいる。また、日々の体操や散歩などの活動を取り入れ、夜間に安眠できるよう努めている。
		b	夜眠れない利用者についてはその原因を探り、その人本来のリズムを取り戻せるよう1日の生活リズムを整える工夫や取り組みを行っている。	◎	昼夜逆転しないように日中のお昼寝の時間などは職員でコントロールしており生活リズムを整えている。	/	/	/	
		c	睡眠導入剤や安定剤等の薬剤に安易に頼るのではなく、利用者の数日間の活動や日中の過ごし方、出来事、支援内容などを十分に検討し、医師とも相談しながら総合的な支援を行っている。	◎	昼夜逆転しないように日中のお昼寝の時間などは職員でコントロールしており生活リズムを整えている。	/	/	/	
		d	休息や昼寝等、心身を休める場面が個別に取れるよう取り組んでいる。	◎	昼夜逆転しないように日中のお昼寝の時間などは職員でコントロールしており生活リズムを整えている。	/	/	/	
22	電話や手紙の支援	a	家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	○	電話をかけたい利用者の希望があれば電話ができるように支援しているし、年賀状は出すようにしている。	/	/	/	
		b	本人が手紙が書けない、電話はかけられないと決めつけず、促したり、必要な手助けをする等の支援を行っている。	○	電話をかけたい利用者の希望があれば電話ができるように支援しているし、年賀状は出すようにしている。	/	/	/	
		c	気兼ねなく電話できるよう配慮している。	○	電話をかけたい利用者の希望があれば電話ができるように支援しているし、年賀状は出すようにしている。	/	/	/	
		d	届いた手紙や葉書をそのままにせず音信がとれるように工夫している。	○	プレゼントが届いた場合は電話で連絡ができるように支援している。	/	/	/	
		e	本人が電話をかけることについて家族等に理解、協力をしてもらおうとともに、家族等からも電話や手紙をくれるようお願いしている。	○	必要がある場合はそのようにしている。	/	/	/	
23	お金の所持や使うことの支援	a	職員は本人がお金を所持すること、使うことの意味や大切さを理解している。	○	理解しているし、買い物ができる利用者には買い物の支援を行っている。	/	/	/	
		b	必要物品や好みの買い物に出かけ、お金の所持や使う機会を日常的につくっている。	○	定期的に買い物に出かけている利用者もいる。	/	/	/	
		c	利用者が気兼ねなく安心して買い物ができるよう、日頃から買い物先の理解や協力を得る働きかけを行っている。	◎	利用者も近くのマートで買い物をすることがあり、店側にも理解してもらっている。	/	/	/	
		d	「希望がないから」「混乱するから」「失くすから」などと一方的に決めてしまうのではなく、家族と相談しながら一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	○	入所時、家族、本人と相談して決めている。	/	/	/	
		e	お金の所持方法や使い方について、本人や家族と話し合っている。	○	入所時、家族、本人と相談して決めている。	/	/	/	
		f	利用者が金銭の管理ができない場合には、その管理方法や家族への報告の方法などルールを明確にしており、本人・家族等の同意を得ている。(預り金規程、出納帳の確認等)。	○	入所時に1万円を預かっており、月での利用金額を明細にして家族に報告するようにしている。	/	/	/	
24	多様なニーズに応える取り組み		本人や家族の状況、その時々ニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	○	なんでも請け負うことはしないが、家族の状況やご本人の状況に合わせて柔軟に対応はしている。	◎	/	◎	事業所では、利用者や家族の希望に応じて、可能な範囲で、柔軟な対応に努めている。また、病院への受診はなるべく家族に協力をお願いしているものの、家族の高齢化等の状況に応じて、職員が同行支援をすることもある。

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(3)生活環境づくり									
25	気軽に入れる玄関まわり等の配慮		利用者や家族、近隣の人等にとって親しみやすく、気軽に出入りができるように、玄関や建物周囲の工夫をしている。	○	寒い間は玄関は網戸にして気軽に入ってこれるようにしている。	◎	○	○	事業所は、地域住民に認知されており、果物や野菜などの差し入れを持ってきてくれることも多い。地域住民が作成した押し花などの作品を、事業所内に展示協力することもある。
26	居心地の良い共用空間づくり	a	共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、家庭的な雰囲気を有しており、調度や設備、物品や装飾も家庭的で、住まいとしての心地良さがある。(天井や壁に子供向けの飾りつけをしていたり、必要なものしか置いていない殺風景な共用空間等、家庭的な雰囲気をそぐような設えになっていないか等。)	◎	施設という雰囲気がでないように配慮している。利用者の制作物もむやみやたらと飾らず、時期が過ぎたら速やかに片づけるようにしている。	◎	○	○	事業所の2階フロアの窓から、瀬戸内海の絶景を眺めることができる。2階の共用空間には畳スペースがあるほか、1階にはテラスもあり、いすやソファも置かれ、利用者は思い思いの場所で寛ぐことができる。また、壁面の一角にある決められたボードには、季節の折り紙などの作品が貼られているほか、生花などが飾られている。さらに、事業所内は掃除が行き届き、イオン発生装置も設置され、清潔感があり、快適な空間となっている。加えて、事業所前の道を挟んで、鶏小屋があり、利用者は水や餌やりなどの世話をしている。
		b	利用者にとって不快な音や光、臭いがないように配慮し、掃除も行き届いている。	◎	臭いには配慮している。またテレビの音量なども不快にならないように注意している。				
		c	心地よさや能動的な言動を引き出すために、五感に働きかける様々な刺激(生活感や季節感を感じるもの)を生活空間の中に採り入れ、居心地よく過ごせるよう工夫している。	○	季節の掲示ができる掲示板を設置しており、折り紙や編みぐるみなどを季節ごとに掲示するようにしている。				
		d	気の合う利用者同士で思い思いに過ごせたり、人の気配を感じながらも独りになれる居場所の工夫をしている。	◎	気の合う利用者同士が一緒にテーブルにつけるようにテーブルのサイズや配置を検討している。				
		e	トイレや浴室の内部が共用空間から直接見えないう工夫している。	◎	そのようにしている。				
27	居心地良く過ごせる居室の配慮		本人や家族等と相談しながら、使い慣れたものや好みのもので活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	◎	それぞれの居室は本人が混乱せず、安全に過ごせるように家族とも相談して置くものを検討するようにしている。	◎		◎	事業所には、仕切りをはずすと2人部屋として使用できる居室もある。居室には、ベッドやたんす等が備え付けられているほか、馴染みの物を持ち込み、利用者に合わせた空間づくりをしている。また、職員が居室内のこまめな清掃や換気を行っている。
28	一人ひとりの力が活かせる環境づくり	a	建物内部は利用者一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように配慮や工夫をしている。	◎	居室やトイレには表札をつけるようにしている。またテラスへの出入り口は自分で出入りできる能力がある方は自由に出入りできるように配慮している。			◎	自分の居室の認識ができるように、名前を大きく分かりやすく表示をしている利用者もいる。また、掃除道具やパズルなど、利用者が自由に手に取れるようにしている。
		b	不安や混乱、失敗を招くような環境や物品について検討し、利用者の認識間違いや判断ミスを最小にする工夫をしている。	○	利用者が触っても問題ないものは自由に扱えるように配置し、反対に触ると困るものについてはこまめに収納するように配慮している。				
		c	利用者の活動意欲を触発する馴染みの物品が、いつでも手に取れるように生活空間の中にさりげなく置かれている。(ぼうし、裁縫道具、大工道具、園芸用品、趣味の品、新聞・雑誌、ポット、急須・湯飲み・お茶の道具等)	◎	パズルや掃除道具などはそれぞれが自由に持って動けるように決められた場所に配置してある。				
29	鍵をかけないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が、居室や日中にユニット(棟)の出入り口、玄関に鍵をかけることの弊害を理解している。(鍵をかけられ出られない状態で暮らしていることの異常性、利用者にもたらす心理的不安や閉塞感・あきらめ・気力の喪失、家族や地域の人にもたらす印象のデメリット等)	◎	外に出ても自分の判断で施設まで戻って来られる利用者については自由に施設周辺を散策できるようにしている。近隣住民の方にも見守りをお願いしている。出入りは施錠しているが、利用者でも開けられるものになっている。	◎	◎	○	身体拘束などの研修会を実施し、職員は鍵をかけることの弊害を理解している。事業所には、不穏な利用者もおり、事業所前に池があることから、日中には玄関の施錠をしているものの、利用者自身の判断で、玄関の鍵を開けて外出する利用者もいる。時には、開放していることで、職員が利用者を探すこともあるものの、近隣住民や社協職員、ゲートボールをしている方から連絡をもらうことができています。利用者の安全面等を考えて、玄関等の施錠をすることは事業所の考え方で仕方のない部分はあるものの、利用者や家族の理解が得られるとともに、外出したい利用者への対応をするなど、職員が理解と認識をした上で支援が行われることを期待したい。
		b	鍵をかけない自由な暮らしについて家族の理解を図っている。安全を優先するために施錠を望む家族に対しては、自由の大切さと安全確保について話し合っている。	◎	外に出ても自分の判断で施設まで戻って来られる利用者については自由に施設周辺を散策できるようにしている。近隣住民の方にも見守りをお願いしている。出入りは施錠しているが、利用者でも開けられるものになっている。				
		c	利用者の自由な暮らしを支え、利用者や家族等に心理的圧迫をもたらさないよう、日中は玄関に鍵をかけなくてもすむよう工夫している(外出の察知、外出傾向の把握、近所の理解・協力の促進等)。	◎	外に出ても自分の判断で施設まで戻って来られる利用者については自由に施設周辺を散策できるようにしている。近隣住民の方にも見守りをお願いしている。出入りは施錠しているが、利用者でも開けられるものになっている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
(4)健康を維持するための支援									
30	日々の健康状態や病状の把握	a	職員は、利用者一人ひとりの病歴や現病、留意事項等について把握している。	○	新規利用者は入所月のミーティングで情報共有しているし、変化がある利用者についてもミーティングや申し送りで情報共有している。				
		b	職員は、利用者一人ひとりの身体状態の変化や異常のサインを早期に発見できるように注意しており、その変化やサインを記録に残している。	○	毎日のバイタルチェックの他にも気になることがあれば個人記録や申し送りに記録するようにしている。また、体調に関して緊急を要する指示がある場合はグループラインなども活用している。				
		c	気になることがあれば看護職やかかりつけ医等にいつでも気軽に相談できる関係を築き、重度化の防止や適切な入院につなげる等の努力をしている。	◎	オンコールで24時間看護師が対応してくれている。また夜間の急変などは岩城診療所の医師も対応してくれる。				
31	かかりつけ医等の受診支援	a	利用者一人ひとりのこれまでの受療状況を把握し、本人・家族が希望する医療機関や医師に受診できるよう支援している。	◎	島内の病院の場合は受診や往診で対応している。島外の病院を受診を希望する場合は家族にお願いして受診してもらっている。家族が対応できない場合は必要であれば職員対応で島外の病院を受診することもある。		◎		
		b	本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	◎	島内の病院の場合は受診や往診で対応している。島外の病院を受診を希望する場合は家族にお願いして受診してもらっている。家族が対応できない場合は必要であれば職員対応で島外の病院を受診することもある。				
		c	通院の仕方や受診結果の報告、結果に関する情報の伝達や共有のあり方等について、必要に応じて本人や家族等の合意を得られる話し合いを行っている。	○	島内の病院の場合は受診や往診で対応している。島外の病院を受診を希望する場合は家族にお願いして受診してもらっている。家族が対応できない場合は必要であれば職員対応で島外の病院を受診することもある。結果は家族と共有するようにしている。				
32	入退院時の医療機関との連携、協働	a	入院の際、特にストレスや負担を軽減できる内容を含む本人に関する情報提供を行っている。	◎	かならず地域連携室にサマリーを送るようにしている。				
		b	安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。	◎	地域連携室と入院前、入院中と細かく連絡をとるように心がけている。				
		c	利用者の入院時、または入院した場合に備えて日頃から病院関係者との関係づくりを行っている。	△	特別な取り組みはしていないが、研修などで顔を合わせるときには挨拶をするようにしている。				
33	看護職との連携、協働	a	介護職は、日常の関わりの中で得た情報や気づきを職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談している。看護職の配置や訪問看護ステーション等との契約がない場合は、かかりつけ医や協力医療機関等に相談している。	◎	月に1度、利用者の状態をモニタリングしたものを岩城診療所と岩城歯科診療所に提出しており、診療所では看護師が、歯科診療所では歯科衛生士がそれぞれに医師と気になる利用者については意見交換している。				
		b	看護職もしくは訪問看護師、協力医療機関等に、24時間いつでも気軽に相談できる体制がある。	◎	看護師が24時間オンコール体制をとっている。				
		c	利用者の日頃の健康管理や状態変化に応じた支援が適切にできるよう体制を整えている。また、それにより早期発見・治療につなげている。	◎	そのようにしている。				
34	服薬支援	a	職員は、利用者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量について理解している。	◎	看護師が直接、またはスマートフォンなどの通信を利用してこまめに説明、指示をしている。				
		b	利用者一人ひとりが医師の指示どおりに服薬できるよう支援し、飲み忘れや誤薬を防ぐ取り組みを行っている。	◎	ダブルチェックができるように仕組みを作っている。				
		c	服薬は本人の心身の安定につながっているのか、また、副作用(周辺症状の誘発、表情や活動の抑制、食欲の低下、便秘や下痢等)がないかの確認を日常的に行っている。	◎	そのようにしている。				
		d	漫然と服薬支援を行うのではなく、本人の状態の経過や変化などを記録し、家族や医師、看護職等に情報提供している。	◎	月に1度、利用者の状態をモニタリングしたものを岩城診療所と岩城歯科診療所に提出しており、気になる利用者については医師と意見交換している。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
35	重度化や終末期への支援	a	重度化した場合や終末期のあり方について、入居時、または状態変化の段階ごとに本人・家族等と話し合いを行い、その意向を確認しながら方針を共有している。	◎	入居時には看取りや重度化した場合の説明をしている。また、体調の変化については家族に都度説明をし、選択肢を提示するようにしている。	/	/	/	事業所には、「重度化した場合の対応に係る指針」があり、入居時に家族に説明している。事業所では、今年度も看取り支援の経験があり、看取り支援後にはデスカンファレンスを行い、職員間で振り返りなどの話し合いをしている。また、家族には居室の片づけ時等にも状況を伝え、感謝されている。重度化した場合には医師を交えて家族と話し合い、方針を共有している。さらに、事業所の看護師や診療所の医師と24時間体制で連絡を取ることができ、職員は安心感がある。加えて、事業所での看取り支援を希望していても、病院や施設へ転院する利用者もいる。
		b	重度化、終末期のあり方について、本人・家族等だけでなく、職員、かかりつけ医・協力医療機関等関係者で話し合い、方針を共有している。	◎	重度化、終末期を迎えた利用者の家族の意向については診療所の医師とも情報共有するようにしている。また、家族にも直接診療所で医師と話し合うことを進めるようにしている。	○		◎	
		c	管理者は、終末期の対応について、その時々の職員の思いや力量を把握し、現状ではどこまでの支援ができるかの見極めを行っている。	◎	家族の思いはもちろん、職員の思いや力量、利用者の状態や思いを勘案して医師と相談しながら方針を決めるようにしている。	/	/	/	
		d	本人や家族等に事業所の「できること・できないこと」や対応方針について十分な説明を行い、理解を得ている。	◎	出来る限り丁寧に納得と理解を得られる説明をするように心がけている。	/	/	/	
		e	重度や終末期の利用者が日々をより良く暮らせるために、家族やかかりつけ医など医療関係者と連携を図りながらチームで支援していく体制を整えている。あるいは、今後の変化に備えて検討や準備を行っている。	◎	そのようにしている。	/	/	/	
		f	家族等への心理的支援を行っている。(心情の理解、家族間の事情の考慮、精神面での支え等)	◎	家族も後悔をしないように関わりを継続できるように支援するようにしている。	/	/	/	
36	感染症予防と対応	a	職員は、感染症(ノロウイルス、インフルエンザ、白癬、疥癬、肝炎、MRSA等)や具体的な予防策、早期発見、早期対応策等について定期的に学んでいる。	◎	年に一度は感染症についての研修を行うようにしている。細かいことは感染が増えている時期などにはミーティングなどでも注意喚起するようにしている。	/	/	/	
		b	感染症に対する予防や対応の取り決めがあり、万が一、感染症が発生した場合に速やかに手順にそった対応ができるよう日頃から訓練を行うなどして体制を整えている。	○	年に一度は感染症についての研修を行うようにしている。細かいことは感染が増えている時期などにはミーティングなどでも注意喚起するようにしている。	/	/	/	
		c	保健所や行政、医療機関、関連雑誌、インターネット等を通じて感染症に対する予防や対策、地域の感染症発生状況等の最新情報を入手し、取り入れている。	○	特にコロナウイルス感染症やインフルエンザに対しては最新情報に注意するようにしている。	/	/	/	
		d	地域の感染症発生状況の情報収集に努め、感染症の流行に随時対応している。	○	社協や健康推進課、他の法人とも情報交換して対応を検討するようにしている。	/	/	/	
		e	職員は手洗いやうがいなど徹底して行っており、利用者や来訪者等についても清潔が保持できるよう支援している。	○	そのようにしている。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
II. 家族との支え合い									
37	本人とともに支え合う 家族との関係づくりと支援	a	職員は、家族を支援される一方の立場におかず、喜怒哀楽をともし、一緒に本人を支えていく関係を築いている。	○	できる家族とできない家族とに分かれている。				コロナ禍において、事業所では面会制限を設けているものの、県内の感染縮小期には、テラスやロビーを活用して、早期の家族との面会対応をしている。中には、SNSのテレビ電話機能を活用し、家族と連絡している利用者もいる。事業所には家族会があり、コロナ禍以前は年2回開催し、普段の利用者の様子を見てもらうほか、管理者等から細かな制度などの説明や外部評価のサービスの評価結果の報告、食事会、個別面談を行うことができていたが、現在は開催を自粛している。また、契約時に気軽に相談できることを伝えているものの、家族からの連絡は少ない。さらに、月1回さくら便りを送付して利用者の生活の様子を伝えるほか、介護計画の見直しの時期には、家族に連絡し、意見や意向を聞いている。加えて、事業所では頻りにブログを更新し、契約時に同意を得た利用者の写真などの情報を伝え、家族から喜ばれている。
		b	家族が気軽に訪れ、居心地よく過ごせるような雰囲気づくりや対応を行っている。(来やすい雰囲気、関係再構築の支援、湯茶の自由利用、居室への宿泊のしやすさ等)	○	なるべくそのようにしているが、コロナ禍のため難しい側面も多い。				
		c	家族がホームでの活動に参加できるように、場面や機会を作っている。(食事づくり、散歩、外出、行事等)	○	コロナ禍もあり難しいところも多くなるべくそのようにしている。			○	
		d	来訪する機会が少ない家族や疎遠になってしまっている家族も含め、家族の来訪時や定期的な報告などにより、利用者の暮らしぶりや日常の様子を具体的に伝えている。(「たより」の発行・送付、メール、行事等の録画、写真の送付等)	○	ブログの更新、月一回のさくら便り、半月に1度の計画の見直しでの連絡などでこまめに様子を伝えるように努力はしている。		◎		
		e	事業所側の一方的な情報提供ではなく、家族が知りたいことや不安に感じていること等の具体的な内容を把握して報告を行っている。	○	なるべく家族の意向も聞き取るように意識している。				
		f	これまでの本人と家族との関係の理解に努め、より良い関係を築いていけるように支援している。(認知症への理解、本人への理解、適切な接し方・対応等についての説明や働きかけ、関係の再構築への支援等)	○	計画の見直し時などに細かくケアの方針や本人の状態を説明するようにしているが、コロナ禍で面会が難しいこと、一緒に実際に過ごせる時間が短いため実際の状態が伝わりにくいことが多い。				
		g	事業所の運営上の事柄や出来事について都度報告し、理解や協力を得るようにしている。(行事、設備改修、機器の導入、職員の異動・退職等)	○	月1のお便りでお知らせをするようにしているが、家族会が開催できていないので一方通行のお知らせできちんと伝わっているかよくわからない。			○	
		h	家族同士の交流が図られるように、様々な機会を提供している。(家族会、行事、旅行等への働きかけ)	×	コロナ禍でできていない。				
		i	利用者一人ひとり起こり得るリスクについて家族等に説明し、抑圧感のない暮らしを大切にしたい対応策を話し合っている。	○	計画の見直し時などに細かくケアの方針や本人の状態を説明するようにしているが、コロナ禍で面会が難しいこと、一緒に実際に過ごせる時間が短いため実際の状態が伝わりにくいことが多い。				
		j	家族が、気がかりなことや、意見、希望を職員に気軽に伝えたり相談したりできるように、来訪時の声かけや定期的な連絡等を積極的にやっている。	○	面会に来た時やちょっとした連絡のときに話をするようにしているが、家族によって偏りがある。			○	
38	契約に関する説明と納得	a	契約の締結、解約、内容の変更等の際は、具体的な説明を行い、理解、納得を得ている。	○	契約時には契約書の全項目を分かりやすい言葉に言い換えたり具体例をあげながら読み合わせしてから締結するようにしている。				
		b	退居については、契約に基づくとともにその決定過程を明確にし、利用者や家族等に具体的な説明を行った上で、納得のいく退居先に移れるように支援している。退居事例がない場合は、その体制がある。	○	退去理由に家族の納得を得てから退去先の手配などを始めるようにしている。退去先がきちんと決まるように支援もしている。こちらから退去をお願いする場合には家族には不満もあるだろうがトラブルにはなっていない。				
		c	契約時及び料金改定時には、料金の内訳を文書で示し、料金の設定理由を具体的に説明し、同意を得ている。(食費、光熱水費、その他の実費、敷金設定の場合の償却、返済方法等)	◎	変更したときは家族会で報告し同意を得て改定を実施した。				

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
Ⅲ. 地域との支え合い									
39	地域とのつきあいやネットワークづくり ※文言の説明 地域：事業所が所在する市町の日常生活圏域、自治会エリア	a	地域の人に対して、事業所の設立段階から機会をつくり、事業所の目的や役割などを説明し、理解を図っている。	◎	茶話会やカフェを主催して施設についての説明や施設内の様子などを説明して理解を得られるようにしている。	/	◎	/	コロナ禍以前は、利用者と一緒に小学校の運動会や持久走の応援などの地域行事に参加したり、自治会の会合や地域清掃などに協力したりすることができていた。管理者を含めて、ほとんどの職員が地元に住んでおり、顔見知りの地域住民も多く、事業所は地域に認識されており、利用者が一人で歩いていると連絡をもらうなどの見守り体制もできている。また、事業所では、小学2年生の「まちたんけん」に協力したり、中学生の頃からつながりのある高校生のボランティアのほか、お話しや散髪などのボランティアを受け入れに協力することができ、交流を深めることができている。さらに、地域で、さくらカフェやさくら浜カフェ、さくら茶話会を開催するなど、地域住民が集える場を提供することができている。さくら浜カフェは、事業所から職員が参加しなくても、地元の方の協力のみで運営できるようになってきている。加えて、保健センターへの行く時に地域住民が事業所へ立ち寄ってくれるほか、果物や野菜などの差し入れを持ってきてくれることも多い。
		b	事業所は、孤立することなく、利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、地域の人たちに対して日頃から関係を深める働きかけを行っている。(日常的なあいさつ、町内会・自治会への参加、地域の活動や行事への参加等)	◎	茶話会やカフェを主催して地域の理解を得られるようにしているし、近くにある小学校とも交流できるように取り組んでいる。	/	○	◎	
		c	利用者を見守ったり、支援してくれる地域の人たちが増えている。	○	小学校や近隣の住人、ゲートボールをしている地域の人や社協の職員が見守ってくれている。	/	/	/	
		d	地域の人が気軽に立ち寄り遊びに来たりしている。	○	コロナ禍で外部の人の来所はお断りしている。	/	/	/	
		e	隣近所の人と気軽に声をかけ合ったり、気軽に立ち寄ってもらうなど、日常的なおつきあいをしている。	◎	散歩やお出掛けなどでは気軽に声をかけてもらったりおしゃべりしたりしている。	/	/	/	
		f	近隣の住民やボランティア等が、利用者の生活の拡がりや充実を図ることを支援してくれるよう働きかけを行っている。(日常的な活動の支援、遠出、行事等の支援)	◎	散歩やお出掛け先のカフェの運営、利用者の話し相手などボランティアの方に色々支えてもらっている。	/	/	/	
		g	利用者一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	◎	ボランティアが運営しているさくらカフェで地域の人たちと交流することができおり利用者の大きな楽しみになっている。	/	/	/	
		h	地域の人たちや周辺地域の諸施設からも協力を得ることができるよう、日頃から理解を拡げる働きかけや関係を深める取り組みを行っている(公民館、商店・スーパー・コンビニ、飲食店、理美容店、福祉施設、交番、消防、文化・教育施設等)。	◎	買い物やお散歩が安心してできるように地域の人々の理解を得られている。施設周辺で好きなことをしている利用者も地域の人たちに見守られて好きなことができています。小学校とも楽しく交流できています。	/	/	/	
40	運営推進会議を活かした取組み	a	運営推進会議には、毎回利用者や家族、地域の人等の参加がある。	◎	今年度は運営推進会議の開催を奇数月第二火曜日と固定したので都合が悪く来られない方も居たけれど地域の方や家族会代表もできるかぎり参加してくれた。	x	/	△	運営推進会議は、利用者や家族、地域住民、ボランティア、社協職員、町担当者等の参加を得て開催をしている。会議の開催は、奇数月の第二火曜日に固定をしている。また、コロナ禍の状況を見極めながら、可能な限り、集合形式の会議開催に努めている。書面開催においても、可能な範囲で資料を参加メンバーに手渡し、意見があれば電話等で意見を連絡してもらいように伝えている。利用者家族等アンケートの結果から、運営推進会議への十分な理解を得ることができていないことがうかがえるため、今後は会議録を家族に送付したり、コロナ禍の終息後の家族会の開催を活用して説明をしたりするなど、家族の理解が得られるような取組みを期待したい。
		b	運営推進会議では、利用者やサービスの実績、評価への取り組み状況(自己評価・外部評価の内容、目標達成計画の内容と取り組み状況等)について報告している。	◎	資料をつくって報告しており、欠席者にも配布するようにしている。	/	/	○	
		c	運営推進会議では、事業所からの一方的な報告に終わらず、会議で出された意見や提案等を日々の取り組みやサービス向上に活かし、その状況や結果等について報告している。	◎	取り組みについて地域や有識者から意見をもらい、取り組みに活かすようにしている。また、次の会議のときに経過の報告などもするようにしている。	/	◎	○	
		d	テーマに合わせて参加メンバーを増やしたり、メンバーが出席しやすい日程や時間帯について配慮・工夫をしている。	△	今年度は開催日を固定したので欠席者が例年に比べて多かった。	/	/	◎	
		e	運営推進会議の議事録を公表している。	△	公表していることを周知していない。	/	/	/	

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
IV.より良い支援を行うための運営体制									
41	理念の共有と実践	a	地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、代表者、管理者、職員は、その理念について共通認識を持ち、日々の実践が理念に基づいたものになるよう日常的に取り組んでいる。	◎	そのようにしている。				
		b	利用者、家族、地域の人たちにも、理念をわかりやすく伝えている。	○	機会があれば伝えるようにしている。	○	◎		
42	職員を育てる取り組み ※文言の説明 代表者:基本的には運営している法人の代表者であり、理事長や代表取締役が該当するが、法人の規模によって、理事長や代表取締役をその法人の地域密着型サービス部門の代表者として扱うのは合理的ではないと判断される場合、当該部門の責任者などを代表者として差し支えない。したがって、指定申請書に記載する代表者と異なることはありうる。	a	代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、計画的に法人内外の研修を受けられるよう取り組んでいる。	◎	月に一度は研修を開催しているし、外部研修も受けられるよう声掛け、支援している。				週1回程度、代表者が1週間分の食材の買い物を兼ねて来訪することがあるものの、ほとんどの運営は管理者に任されている。事業所では、全体ミーティングの後に、月1回研修会を実施して、職員のスキルアップに努めているほか、外部研修にも参加できるよう支援している。また、管理者は、職員の退社のタイムカードを押す時に声をかけ、職員の話を聞くとともに、相談にも応じている。さらに、職員は管理者に話やすく、幅広い年代の職員同士の良好な関係ができています。加えて、事業所では勤務シフトなどの交代も柔軟に対応してくれ、職員は働きやすい職場環境と感じており、職員の離職率も低い。
		b	管理者は、OJT(職場での実務を通して行う教育・訓練・学習)を計画的に行い、職員が働きながらスキルアップできるよう取り組んでいる。	○	計画的には行っていないが、スキルアップできるように配慮はしている。				
		c	代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	○	そのようにしている。				
		d	代表者は管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互研修などの活動を通して職員の意識を向上させていく取り組みをしている。(事業者団体や都道府県単位、市町単位の連絡会などへの加入・参加)	○	コロナ禍で機会は減っているがそのようにしている。				
		e	代表者は、管理者や職員のストレスを軽減するための工夫や環境づくりに取り組んでいる。	○	そのようにしている。		◎	○	
43	虐待防止の徹底	a	代表者及び全ての職員は、高齢者虐待防止法について学び、虐待や不適切なケアに当たるのは具体的にどのような行為なのかを理解している。	○	研修を行い理解を深めている。				毎月実施する研修会の中で、虐待防止などを取り上げて、職員は学んで理解をしている。気になることがあれば、日々の朝の申し送りなどを活用して、話し合いをしている。また、不適切な言葉づかいが聞かれた場合には、管理者から個別に該当職員に注意喚起をするほか、職員同士でも注意し合えるようになってきている。さらに、年1回虐待防止などのマニュアルを職員間で読み合わせを行い、詳細な内容を確認している。
		b	管理者は、職員とともに日々のケアについて振り返ったり話し合ったりする機会や場をつくっている。	◎	毎朝のミーティングで気になること、記録の内容などで小さな問題も話し合っている。				
		c	代表者及び全ての職員は、虐待や不適切なケアが見逃されることがないように注意を払い、これらの行為を発見した場合の対応方法や手順について知っている。	○	年に一度マニュアルについて確認するようにしている。			○	
		d	代表者、管理者は職員の疲労やストレスが利用者へのケアに影響していないか日常的に注意を払い、点検している。	○	終業時に面談をしたりするようにして配慮している。				
44	身体拘束をしないケアの取り組み	a	代表者及び全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」や「緊急やむを得ない場合」とは何かについて正しく理解している。	◎	年に2回は研修を行っているし、日々の業務の中でも確認するようにしている。				
		b	どのようなことが身体拘束に当たるのか、利用者や現場の状況に照らし合わせて点検し、話し合う機会をつくっている。	◎	ミーティングや日々の申し送りのなかで点検できる機会を設けているし、話し合いも行っている。				
		c	家族等から拘束や施設への要望があっても、その弊害について説明し、事業所が身体拘束を行わないケアの取り組みや工夫の具体的な内容を示し、話し合いを重ねながら理解を図っている。	◎	ミーティングや日々の申し送りのなかで点検できる機会を設けているし、話し合いも行っている。				

項目No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
45	権利擁護に関する制度の活用	a	管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学び、それぞれの制度の違いや利点などを理解している。	△	研修など理解を深める取り組みはしているが、知識として定着していない。				
		b	利用者や家族の現状を踏まえて、それぞれの制度の違いや利点なども含め、パンフレット等で情報提供したり、相談にのる等の支援を行っている。	○	地域で主催しているカフェなどで啓蒙活動を行っている。				
		c	支援が必要な利用者が制度を利用できるよう、地域包括支援センターや専門機関(社会福祉協議会、後見センター、司法書士等)との連携体制を築いている。	○	相談があれば窓口につなぐようにしている。				
46	急変や事故発生時の備え・事故防止の取り組み	a	怪我、骨折、発作、のど詰まり、意識不明等利用者の急変や事故発生時に備えて対応マニュアルを作成し、周知している。	○	マニュアルを確認したり、救命講習の際に確認したりしている。				
		b	全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	○	救命講習などで年に数回、訓練できるようにしている。				
		c	事故が発生した場合の事故報告書はもとより、事故の一手手前の事例についてもヒヤリハットにまとめ、職員間で検討するなど再発防止に努めている。	○	そのようにしている。				
		d	利用者一人ひとりの状態から考えられるリスクや危険について検討し、事故防止に取り組んでいる。	○	そのようにしている。				
47	苦情への迅速な対応と改善の取り組み	a	苦情対応のマニュアルを作成し、職員はそれを理解し、適宜対応方法について検討している。	△	苦情対応マニュアルはなく、苦情は管理者に上げるようにしている。				
		b	利用者や家族、地域等から苦情が寄せられた場合には、速やかに手順に沿って対応している。また、必要と思われる場合には、市町にも相談・報告等している。	◎	そのようにしている。				
		c	苦情に対しての対策案を検討して速やかに回答するとともに、サービス改善の経過や結果を伝え、納得を得ながら前向きな話し合いと関係づくりを行っている。	◎	そのようにしている。				
48	運営に関する意見の反映	a	利用者が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、個別に訊く機会等)	○	職員が利用者の要望を聞くことが主だが、内容によっては施設長や管理者が利用者と個別に話をして意見や思いを聞くこともある。			○	日々の生活の中で、職員は利用者から意見や要望を聞くよう努めているものの、利用者から出される意見は少なくなってきた。家族からは、「面会制限の解除をしてほしい」などの意見は聞かれるものの、家族会の開催ができていないため、意見は少なくなってきた。また、管理者は、日々の退社時に職員に声をかけ、小さいことでも相談に応じるとともに、利用者のサービスの向上に繋がる意見は積極的に受け入れ、アドバイスなどを行っている。
		b	家族等が意見や要望、苦情を伝えられる機会をつくっている。(法人・事業所の相談窓口、運営推進会議、家族会、個別に訊く機会等)	○	コロナ禍前は家族会でそれぞれの家族から直接意見を聞く機会が年に2回あったけれど、今は面会のときと計画見直しの際の電話でしか聞けないので少し不足しているかもしれない。	◎		○	
		c	契約当初だけではなく、利用者・家族等が苦情や相談ができる公的な窓口の情報提供を適宜行っている。	△	そのような機会はない。				
		d	代表者は、自ら現場に足を運ぶなどして職員の意見や要望・提案等を直接聞く機会をつくっている。	△	週に1回は施設にきているが滞在時間が短いので十分ではないかもしれない。				
		e	管理者は、職員一人ひとりの意見や提案等を聴く機会を持ち、ともに利用者本位の支援をしていくための運営について検討している。	○	ミーティングや申し送り、終業後の面談などでなるべく意見をきくようにしている。			◎	

項目 No.	評価項目	小項目	内容	自己評価	判断した理由・根拠	家族評価	地域評価	外部評価	実施状況の確認及び次のステップに向けて期待したいこと
49	サービス評価の取り組み	a	代表者、管理者、職員は、サービス評価の意義や目的を理解し、年1回以上全員で自己評価に取り組んでいる。	○	自己評価の項目は職員にも研修などで伝える機会を設け、部分的に自己評価に参加してもらっている。	/	/	/	外部評価の自己評価は、職員の意見を取り入れ、管理者が作成をしている。外部評価のサービスの評価結果は運営推進会議の中で報告を行うほか、全体ミーティングなどを活用して、全ての職員に周知することができる。また、評価結果から、目標達成計画を作成するとともに、職員全員で目標達成に向けて取り組み、サービスの向上に繋げることができている。
		b	評価を通して事業所の現状や課題を明らかにするとともに、意識統一や学習の機会として活かしている。	◎	評価の結果はミーティングでフィードバックし、サービス向上に努めている。	/	/	/	
		c	評価(自己・外部・家族・地域)の結果を踏まえて実現可能な目標達成計画を作成し、その達成に向けて事業所全体で取り組んでいる。	◎	評価の結果はミーティングでフィードバックし、サービス向上に努めている。	/	/	/	
		d	評価結果と目標達成計画を市町、地域包括支援センター、運営推進会議メンバー、家族等に報告し、今後の取り組みのモニターをしてもらっている。	◎	運営推進会議の中で評価の結果や今後の取り組み目標などは説明するようになっている。	○	○	○	
		e	事業所内や運営推進会議等にて、目標達成計画に掲げた取り組みの成果を確認している。	○	評価結果を伝える時に前年に掲げた目標の評価も伝えるようになっている。	/	/	/	
50	災害への備え	a	様々な災害の発生を想定した具体的な対応マニュアルを作成し、周知している。(火災、地震、津波、風水害、原子力災害等)	○	マニュアルを作成し、玄関に掲示している。	/	/	/	事業所では、利用者と一緒に火災や地震、水害を想定した避難訓練を実施している。訓練では、実際に2階への垂直避難の訓練を行い、課題等を確認している。また、コロナ禍以前は、運営推進会議に合わせて、避難訓練を実施することができていたものの、コロナ禍において、事業所のみで訓練を実施することができていたものの、コロナ禍において、事業所のみで訓練を実施している。さらに、事業所として、地域の防災訓練に参加協力をすることができていた。事業所便りを活用して家族に報告できているものの、利用者家族アンケート結果からは、全ての家族にまでは十分に伝わっていないことがうかがえるため、コロナ禍の収束後には家族会などを活用して報告したり、家族に訓練への参加協力を呼びかけたりするなど、家族に理解が得られる取り組みを期待したい。
		b	作成したマニュアルに基づき、利用者が、安全かつ確実に避難できるよう、さまざまな時間帯を想定した訓練を計画して行っている。	○	年に数回、マニュアルにそった訓練をしマニュアルを改定している。	/	/	/	
		d	消火設備や避難経路、保管している非常食・備品・物品類の点検等を定期的に行っている。	○	そのようにしている。	/	/	/	
		e	地域住民や消防署、近隣の他事業所等と日頃から連携を図り、合同の訓練や話し合う機会をつくるなど協力・支援体制を確保している。	△	地域の避難訓練には参加するようになっているが、コロナ禍で2年ほど地域の避難訓練が中止されている。	x	○	○	
		f	災害時を想定した地域のネットワークづくりに参加したり、共同訓練を行うなど、地域の災害対策に取り組んでいる。(県・市町、自治会、消防、警察、医療機関、福祉施設、他事業所等)	△	地域の避難訓練には参加するようになっているが、コロナ禍で2年ほど地域の避難訓練が中止されている。	/	/	/	
51	地域のケア拠点としての機能	a	事業所は、日々積み上げている認知症ケアの実践力を活かして地域に向けて情報発信したり、啓発活動等に取り組んでいる。(広報活動、介護教室等の開催、認知症サポーター養成研修や地域の研修・集まり等での講師や実践報告等)	◎	地域の人向けに月に1回の勉強会や週に1回のサロンを開催して啓蒙活動に取り組んでいる。小学校でも認知症についての授業をさせていただいた。	/	/	/	事業所として、地域住民から相談があった場合は快く対応をしている。事業所では、家族に配布する事業所便りのほかに、年4回地域へ配布用の事業所便りを発行し、地域住民に新聞の折込チラシで事業所の取り組みを周知するなど、地域住民から認識されるようになってきている。月1回、商工会議所を活用して、地域住民も参加できる「さくら茶話会(認知症カフェ)」を開催し、認知症などの相談支援をすることができている。また、一昨年から地域住民も集える「さくら浜カフェ」を開催しているほか、新たに介護者の家族の会等から、地域に集える場づくりの相談があり、現在検討をしている。さらに、小学生の「町たんけん」や高校生のボランティアの受け入れに協力するとともに、町行政や地域包括支援センター、社協等との連携を図ることができている。
		b	地域の高齢者や認知症の人、その家族等への相談支援を行っている。	○	サロン等で相談窓口や介護保険の使い方の説明をしているし、職員が個別に地域で相談を受けることもあるようだ。	/	△	○	
		c	地域の人たちが集う場所として事業所を解放、活用している。(サロン・カフェ・イベント等交流の場、趣味活動の場、地域の集まりの場等)	◎	コロナ禍で事業所は解放していないが、商工会議所や開発センターを利用して地域の集いの場を作っている。	/	/	/	
		d	介護人材やボランティアの養成など地域の人材育成や研修事業等の実習の受け入れに協力している。	△	保健センターにきた実習生の見学や小学生のまちたんけんには協力している。	/	/	/	
		e	市町や地域包括支援センター、他の事業所、医療・福祉・教育等各関係機関との連携を密にし、地域活動を協働しながら行っている。(地域イベント、地域啓発、ボランティア活動等)	○	そのようにしている。	/	/	◎	